

290
70



始



靈界
物語

海
洋
萬
里

4
の
巻

瑞月口述



出巴瑞今口日練

〔圖景物語第三十一卷〕

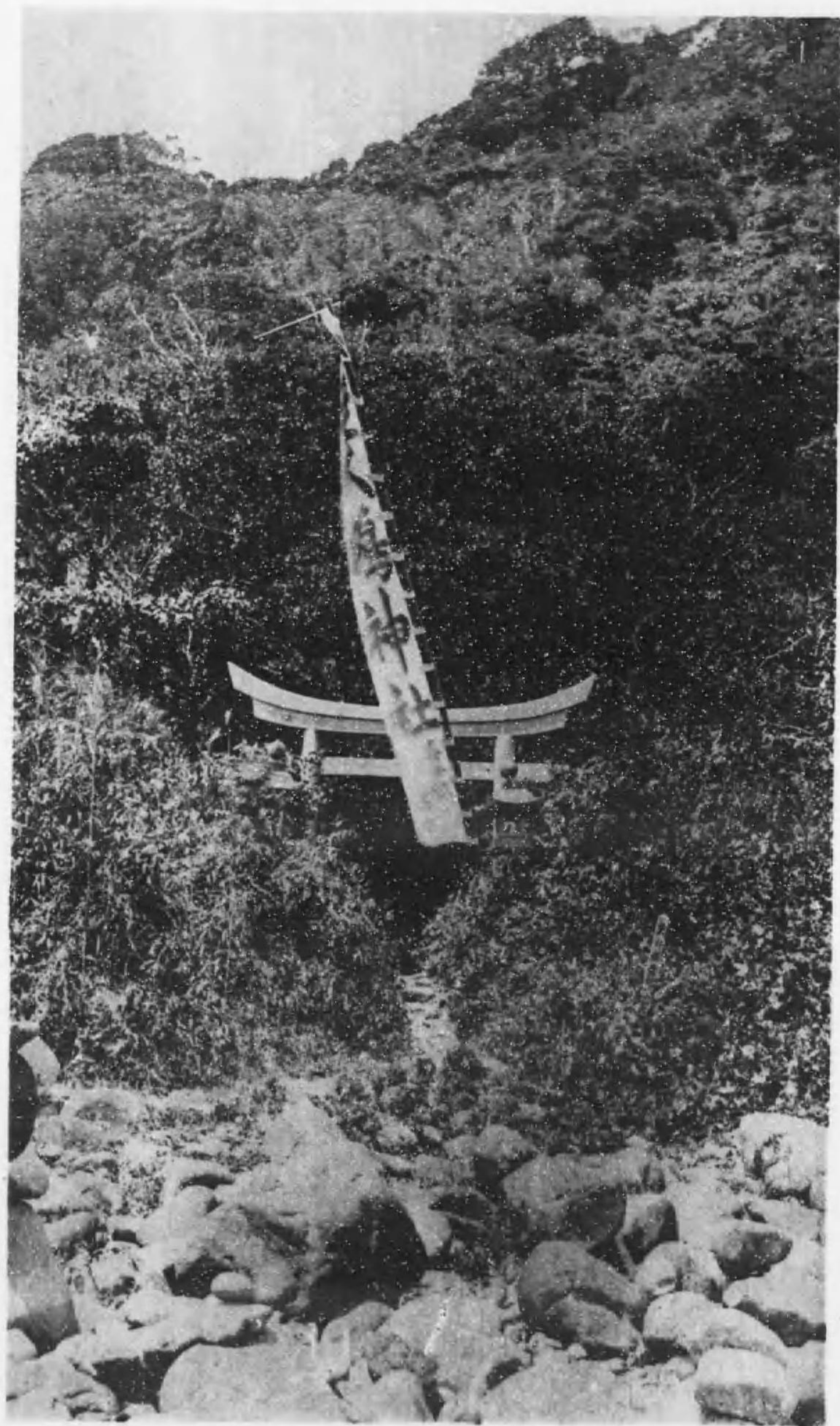
煉洋萬里人

天青社發行

大正
12. 11. 3
内交



1083036



冠 島

特501
123

綾部の聖地を跡にして

我家を伊豆の温泉場

幽邃閑雅の山家村

狩野の流れに臨みたる

湯ヶ島温泉湯本館

何に利く加和知らね共

一度は来たれと信徒が

送る玉章細胡麻と

序

歌

序歌

綾 部 山 和 胡

部 家 知 麻

見るも嬉しき我思ひ

教主殿をば田ち出で

松村真澄、佐賀伊佐男

園ほか一部の伊豆信者

杉山當一林ナミ

入木つく様な夏の空

静かに進む汽車の上

壽も長き龜岡の

瑞祥祝ふこの旅行

嗟峨しあてたる好避暑地

殿 田

園 部

入 木

龜 岡

嗟 峨

言葉の花や教の園

二人の幹部と諸共に

只一と條に勇み行く

丹波綾部に名も高き

出口の神の御教を

京都、大阪、東京の

三大都市を始めとし

山科里に至るまで

皇大神の大道を

津多へ擴むる神司

花 園

二 條

丹 波 口

京 都

山 科

大 津

堅き心は石山の

月照り渡る如く也

青人草を津々が無く

守りたまへと祈りつゝ

山野を州々みて篠すまき

露野が原も乗りこらて

いつかは日の出の神の代に

近江の國や入幡宮

嚴の御前にぬかづきて

浦安土の心やすく

石山

草津

守山

野州

篠原

近江入幡

安土

守り玉へど太能里登

宣る言靈は速川の

水瀬の音と聞ゆ也

稻穂は榮枝て黄金の

波漂はす河の瀬や

國武彦の永遠に

守り玉へる豊秋津

根別の國の八千米は

高天原に天照らす

皇大神のみことり

能登川

稻枝

河瀬

彦根

米原

天の下なる人草の

食ひて生くべきものなりと

その神勅をひるも夜も

尊み眼も醒ヶ井の

神の恵みに近江路や

御代長かれと祝ふなる

龜のよはひの龜岡に

教の庭を開きつゝ

打つ柏手の音も清く

高天原と鳴り渡る

醒ヶ井

近江長岡

柏原

神と鬼との關ヶ原

惠の路も垂井驛

吾大本は青垣の

山をば四方に廻らして

神の鎮まる靈場と

數多の人々我一に

先を争ひ木曾川や

神の光りに仰岐阜し

尾張に近き暗の世を

救ひ玉へど真心を

關ヶ原

垂井

大垣

木曾川

岐阜

一つに固めて木宮山

遠き山路も稻みなく

いと澤々に寄り来る

神の經緯ぞ畏けれ

天の眞奈井の枇杷の湖

竹生の島に願れませる

神の猛びを名古めつ

屋間登御魂の神人が

熱き心を田向け行く

尾張一ノ宮

稻澤

枇杷島

名古屋
熱田

大高

大府

刈谷

安城

岡崎

神徳大くいや高き

皇大神の生れまして

清き神府と定めまし

世の大元は爰彦刈

豊葦原の中國の

安全地帯ぞ金城と

尊み敬ひ許々太久の

阿せし罪を悔い乍ら

御靈崎はへ坐しませと

赤き心のまめ人が

幸願ぎ奉り田のむ也

蒲の亂れの郡集を

皇大神の御仁慈の

清き油を躑がれて

豊に渡る神の橋

二川三河の水清く

小雲の川や玉水に

身そぎ成めて神徳を

信徒たちが鷺津神

舊きを捨す新しく

幸 田

蒲 郡

御 油

豊 橋

二 川

小 雲

身 鷺

信 津

舊 新

居所を定むる神の町

心も勇みて辨天の

女神の前に真心を

つく島つりし音楽や

舞曲も清くさはやかに

御代の阪むむ瑞祥を

濱の松風音もなく

世は平けく天龍の

勢強く川登り

心の中に靈泉の

新 居 町

辨 天 島

舞 阪

濱 松

天 龍 川

甘露は盡きず湧き出で

神代を祝ふぞ尊けれ

袋井首に掛川の

貧しき人も神の道

悟りて愁を堀ノ内

誠の教を守りなば

富貴も權威も金谷せぬ

神の御教を敷島の

大和心を出鶴ねれば

中 泉

袋 井

掛 川

堀ノ内

金 谷

島 田

薫り目出度き白梅の
花藤答枝よ 惟神

醜の仇草焼鎌の

敏かまや津沼岐ぬき用て

宗打ち拂ひ静々

風雨雷電岡しつ

誠の道江一敷に

尻に帆かけて進み行く

あゝ惟神々々

御意幸倍ませよ

藤 枝

焼 津

用 宗

静 岡

江 尻

昔の元の大神が

現はれまして太元の

救ひの道を興し津々

由比所の深き蒲生の原

開きて根本豊穡を

岩秀の如く彌固く

淵なす深き經綸を

富士の御山のいや高く

立て、天地の神人が

興 津

由 比

蒲 原

岩 淵

生言靈の鳴り渡る

五十鈴の川の川水に

原ひ清めて朝露の

干沼の池に照る津岐の

影も涼しく神の世を

開き玉ふぞ尊けれ

三月三日の桃の花

五月五日の桃實に

比すべき靈界物語

富 士

鈴 川

原 津

沼 津

故郷の土産と瑞月が

心も清く住の江ノ

浦安國の神寶と

語る出口野神の教

天皇山に祭りたる

皇大神の御守りを

嬉しみ尊み神勅を

北條南條畏みて

田舎男や京わらべ

遠き耳にも入り易く

桃郷

江ノ浦

口野

天皇山

北條

解き明かしたる神の書

迎への人の親切も

酒の泉の吉田郷

車を止めて杉原家

殊更厚き待遇に

三伏の暑を打忘れ

心も深き眞清水の

湯槽に浸り汗水を

流して西瓜の腹づつみ

敵の信徒も大仁や

南條

田京

吉田

大仁

瓜生野

瓜生野の里も打過ぎて

豎と横との五十鈴川

言靈車瀬を速み

國常立野大神が

平和の御世を松ヶ瀬や

青羽の根配りいや廣く

茂る稲田の富貴草

出口の王仁の一行は

早くも伊豆に月ヶ瀬や

天津御空の神門野

横 瀬

立 野

大 平

松 ヶ 瀬

青 羽 根

出 口

月 ヶ 瀬

開け行くてふ玉の原

天の入重雲掻き分けて

救ひの神も嵯峨澤の

今日の旅行ぞ楽しけれ

木々に鳴る蟬の聲

市なす山の片ほどり

東西南北風清く

平和の里と湯ヶ島の

狩野の流れに浴み乍ら

漸く安藤の宅につき

門 野 原

嵯 峨 澤

市 山

西 平

湯 ヶ 島

心よりなるもてなしに
歌び勇み湯浴して

またもや例の物語

口述如來の瑞月が

安全椅子によりかゝり

淨寫菩薩の松村氏

腕に燃かけすらく〜と

「海洋萬里」午の巻

いよ〜爰に述べ寫す

あ、惟神靈幸倍坐世

「海洋萬里」卯の巻四日間、同辰の巻三日、同巳の巻三日、前後合せて十日間。述べ
つ寫しつ、暑さに堪わし休養日を幸ひ、筆のすさびのいと永々と記しておく。

大正十一年八月十七日

於湯ヶ島温泉

口述者 瑞月 識

瑞月

此處を宿まや しそむらむ
 溶ける氷さ 春風は
 草と虫との 始めなり
 結びし霜さ 秋風は
 草と虫との 終りなり
 廻りくつて 幾千代も
 同じことをば 繰り返す

かたく氷りし 深山の雪も
 そよそ吹き来る 春風に
 誘はれながら 溶け初めぬ
 さけて流れて 谷川の
 同じ水さぞ なりにけり
 流れくつて 未遠く
 野邊の草葉を ひたし行く
 草は根本を 露はされ
 風にさそはれ 延び始む
 風さ水さは 草むらな
 繁らす種さ なりにけむ
 耳根にすたく あの虫も

海洋萬里「午の巻」目次

序歌.....頁
 総説.....一

第一篇 千狀萬態

第一章 主一無適.....	三
第二章 大地震.....	一八
第三章 救世神.....	二八
第四章 不知戀.....	四二
第五章 秋鹿の叫.....	五八
第六章 女弟子.....	七四

第一篇 紅裙隊

第七章	妻の選舉	八五
第八章	人獸	一〇五
第九章	誤神託	一二二
第一〇章	噂の影	一三九
第十一章	賣言買辭	一五四
第十二章	冷い親切	一六七
第十三章	姉妹救	一八三

第三篇 千里萬行

第十四章	樹下の宿	一九九
第十五章	丸木橋	二一五
第十六章	天狂坊	二三一

第十七章	新しき女	二四七
第十八章	シーゾンの流	二六四
第十九章	怪原野	二七八
第二〇章	脱皮婆	二八八
第二一章	白毫の光	二八九

第四篇 言靈將軍

第二二章	神の試	三二四
第二三章	化老爺	三二六
第二四章	魔違	三四〇
第二五章	會合	三五〇

海洋萬里(午の巻)目次終

海洋萬里 [午の巻] [31]

口述者 出 口 瑞 月

筆録者 松 村 眞 澄

總 說

本巻は秘露の國アラシカ山麓のウラル教の宣傳使の娘エリナの家にて、國依別の宣傳使が四五日間滞在の上、楓別命のヒルの神館に進む途上、大地震に出會ひ、紅井姫の危難を救ひたる事より、ウラル教の日暮シ山の岩窟に於て、ブール一派を歸順せしめ、エスの危難を救ひ、それより紅井姫、エリナをエスに一任しおき、安彦、宗介の二人を伴ひ、ブラジル峠の谷間を越え、シーズン川に於て、秋山別、モリスの二人の生命を救

ひ、屏風山脈の最高地、帽子ヶ岳に登り、言依別に邂逅し、茲に兩雄は協心戮力、アマ
ゾン川及び時雨ノ森の邪神を言向け和せ、鷹依姫の一行を始め高姫一行を救ふ策源地と
定めたる所まで口述せる、珍らしき古代の物語であります。

大正十一年八月二十日(舊六月二十八日)

於湯ヶ島温泉 瑞 月 誌

第一篇 千 狀 萬 態 (一五六)

第一章 主一無適 (八六七)

千早振遠き神代の昔より

天津御神の神言もて

普く世人を救はん

豊國姫の神御靈

天と地とを兼ね玉

安きに救ひ助けん

埴安彦や埴安姫の

黄金山下に三五の

珍の都のエルサレム

國治立大神は

野立彦と現はれまし

野立姫と現はれて

百の神人草木まで

心を千々に配りまし

貴の命と現はれて

神の教を樹て玉

主一無適

救ひの道を宣り玉ふ

守り玉へる天教山の

日の出神の珍御子が

瑞の御靈の神業を

開き玉ふぞ尊けれ

根別の國と名に負ひし

綾の高天の靈場に

暫し隠れて四尾山

五六七の御世を來さんと

嚴と瑞との神御靈

此御教を朝夕に

木の花姫を始めとし

神素葦鳴大神の

輔け玉ひて世に廣く

豊葦原の瑞穂國

自轉倒島の中心地

國治立 大神は

國武彦と名を替へて

桶伏山の片ほとり

玉照彦や玉照姫を

錦の宮の神司と

教の庭を開かせつ

錦の宮の教主とし

東の神都は桶伏の

太く建てたる神柱

言依別 命をば

神の司を養ひて

國の八十國八十島を

光りに照らし露に浴し

寂光淨土の天國に

定め玉ひて三五の

言依別の瑞御靈

西の神都はエルサレム

靈山會場の神の山

緯の御靈と聞わたる

道の教主と任せ玉ひ

自擬島を初とし

皇大神の御恵みの

曇り切つたる現世を

造り成さんと千萬に

いそしみ玉ふ有難さ
 中にも清き神司
 教主の後に従ひて
 神のまに／＼和田の原
 波に浮べる高砂の
 夜を日に繼いで三倉山
 祠に二人は參拜し
 救ひ助けて人々に
 教言依別 命は
 末子の姫の現れませる

教司の其一人
 國依別の宣傳使は
 自擬島を出立し
 嵐を分けてやう／＼に
 テルの港に上陸し
 國魂神を祀りたる
 飢に迫りし國人を
 救ひの神を崇められ
 袂を分ちウツの國
 都をさして出で、行く

後に残りし國依別は
 無道極まる迷信を
 此場を立ちてヒルの國
 夜の荒シの森蔭に
 時しもあれやウラル教
 集めて再び出で來り
 圍みて生命を奪ひ取り
 織滅せんと襲ひ來る
 珍の神術に蹴散らし
 感謝し奉る折もあれ

輕生重死のウラル教が
 打破し盡して深く
 櫻の花もテルの里
 辿りて息を休め居る
 亂れ散りたる信徒を
 國依別を十重二十重に
 三五教を根抵より
 醜の魔神を悉く
 皇大神の御前に
 キジとマチとの二人の男

國依別の神徳を

師弟の約を結びつゝ

進む折しもウラル教の

數多の部下を引率し

ヒルの都に三五の

楓別命の靈場を

打破らんと進み來る

キジとマチエの兩人は

鎮魂歸神言靈の

完美に委曲に授けられ

慕ひて茲に走せ來り

日暮シ河の河の邊に

アナン、ユーズの兩人は

劍竹槍携へて

教を傳ふ神司

夜陰に紛れて蹂躪し

此一隊に出會し

國依別の司より

幽玄微妙の神力を

勇み進んで河の邊を

進みて來る魔軍に

不意を打たれて敵軍は

茲に三人は夜の道

険しき峠を攀登り

道の片方の古社

聳り立ちたる木下蔭

認めて近づき伺へば

エスの娘と聞きしより

親切こめて問ひ糺し

明め盡し兩人は

向つて言靈打出せば

雲を霞と逃けて行く

スタ／＼進みアラシカの

東北指して降り行く。

楠の古木の天を磨し

額つき拜む人影を

ウラルの道の神司

キジは言葉も柔かく

茲に様子を詳さに

國依別に相別れ

日暮シ山の岩窟に

一日も早く助けんじ

國依別の神司

アラシカ山の麓なる

暫くここに逗留し

ヒルの都に立寄りて

キジ、マチ二人を助けんじ

進みてブールの神司

高砂島は云ふも更

蘇かしたる物語

囚はれ苦しむエスの身を

勇み進んで出で、行く。

エスの娘に従ひて

エスが館に立ち向ひ

神の教を宣べ傳へ

楓別に面會し

日暮シ山の岩窟に

言向け和し驍名を

豊葦原の國中に

狩野の溪流眺めつ、

初秋の風を浴び乍ら

敷島煙草をくゆらしつ

いよく靈界物語

ペラく茲に述べ立つる

御靈幸はひまませよ。

安樂椅子に横はり

淨寫菩薩と立向ひ

三十一の巻始め

あゝ、惟神々々

國依別はエリナに導かれ、エスの家に漸く着いた。エリナの母は思ひの外の重病にて、殆ど人事不省の体であつた。國依別は取る物も取敢ず、草鞋をどくどく座敷に駈上り、直に天津祝詞を奏上し、天の數歌を稱へあげ、鎮魂を施し、いろく雑多の丹精をこらして、病氣回復の途を謀つた。されど如何したものか病人は少しも快方に向はない。日にく衰弱甚だしく、最早絶望の域に進んだ。エリナは一生懸命に水垢離

を取り……

「三五教の大神國治立命様、常世神王様、何卒々々父の危難を遁れさせ玉へ、母の難病を今一度救はせ玉ひて、夫婦親子が假令一日なり共、嬉しく楽しく、互に顔を見合はせ、惠の露にうるほひまする様……」

と、我れを忘れて祈願を凝らして居る。されどエリナの心中は未だ主一無適の精神には成り得なかつた。其理由は、國治立命果して善の神か？ 但は常世神王の方が善であるか？ 國治立神を念じなば、常世神王の神怒に觸れて、益々母の病は重り、父の大危難は愈深くなり行くには非ざるかとの疑念が、頭腦の中に往來してゐたからである。

國依別はエリナの心の中を推知し、四五日茲に逗留して、いろ／＼難多と善惡不二顯幽一本の眞理を説き諭したれども、父母の災厄に周章狼狽したる若き娘の事とて、千言萬語を盡しての國依別の教示も、容易に頭に入らなかつた。唯一日も早く父の危難を救はれ、母の重病の癒やされんことにのみ餘念なく、一心不乱になり乍ら、信仰上の點に於て非常に迷ひ苦しんで居た。それ故神徳充實したる國依別命の鎮魂も、言靈も功驗を現はすことが出来なかつたのである。

凡て信仰は迷ひを去り、雜念を拂ひ、理智に走らず、只何事も神意に任せ奉り、主一無適の心にならなくては、如何な尊き神人の祈念と雖も、如何に權威ある言靈と雖も、容易に其効を顯はすことは出来ないものである。要するにエリナの信仰は二心であつた。悪く言はば内股膏藥的信仰に墮して居た。幼少の頃より宇宙間に於て常世神王に優る尊き神はなく、又常世神王に勝るべき權威はなし、万一常世神王の忌憚に

觸れんか、現界は云ふも更、靈界に於ても無限の苦しみを受け、且つ嚴罰に處せらるべしとの信仰を深く心の底より植わ付けられて居たから、誠の神の教を喜びて聴聞し乍らも、不安の雲に包まれ、煩悶苦惱を續けて居たからである。

國依別は容易にエリナの信仰の動かざるを悟り、且つ彼の母の病氣は到底救はれざることを悟つて、いよく此處を立去り、ヒルの都に向ふ事となつた。

國依別はエリナに向ひ、

國依「エリナさん、永らく御世話になりましたが、貴女の御信仰は何うしても徹底致しませぬ。それも無理のなき事でせう。付いてはお母アさんの御病氣も最早絶望ですから、其お積りで居て下さい。又エスさんを救ひ出さんとして、日暮シ山の靈場に向つたキジ公、マチ公の兩人は未だ歸つて來ないのも、何か神界に於て深き思召し

のある事でせう。父を救ひ、母を救はんどのあなたの真心は實に威服の至りですが斯かる場合には、あなたの日頃信ずる常世神王様に、主一無適の真心を捧げて御願ひなさる方が却て御神力が現はれるでせう。三五教の主神國治立命様は、あらゆる萬民の苦みを助け下さる有難き神様なれど、あなたの信念力が二つに割れて居りますから、神様も救ひの御手を伸べさせ玉ふ事が出来ませぬ。斯う申せば、國治立命様は餘程氣の狭い偏狹な神様だと思はれるでせうが、決して左様な不公平な神様ではありません。只あなたが神様は元は一株だから、常世神王様を念じても、國治立命様の様は決して御怒りなく、又國治立命様を何程一心に念じたとして、常世神王様が御立腹遊ばすものでないに云ふ事が御分りにならなくては、信仰は駄目です。神様の方ではそんな小さい牆壁や區劃は有りませぬが、貴女の心の中に區劃をつけたり

深き溝渠を穿つたり、いろくゝと煩悶の雲が包んでゐるから、何程神様が御神徳を奥へやうと思召しても、お前さんの方に感じないのだから仕方が有りませぬ。それ故あなたのも最も信ずる、常世神王様に御祈願をなされた方が、却て御安心でせう。私は是から御暇を致します。こゝ暫くの間は、ヒルの都の楓別命の神館に逗留の考へでムいますから、御用があつたら、國依別と云つてお訪ね下さいませ。何時でもお目にかゝります。又幸ひにエスさん始めキジ、マチの兩人が歸つて來られたら、國依別はヒルの都に逗留して居るからと、傳言を願ひます。左様ならばエリナさん、御病人様を大切に下さいませ」

と立出でんとするを、エリナは同章、引どめ

エリナ「モシ／＼宣傳使様、さうぞさう仰有らずに、暫く御逗留遊ばして下さいませ。」

これから心を入れ替へて、あなた様の仰せに従ひ、信仰を致しますから……」

國依「心の底から發根と分つての信仰でなければ到底駄目です。神様は仁慈無限の御方故、別に頼まず共、助けてやりたいと思召し、種々力を御盡し遊ばしてムるのですが、あなたの心の中の執着と云ふ曲鬼が神徳を遮つて居るのです。其曲鬼をあなた自ら追出さねば到底駄目ですよ。國依別が別れに臨んで、御注意申上げておきます。左様ならば……」

と後に心を残しつつ、國依別は此家を立出でヒルの都を指して進み行く。

(大正一一、八、一八、舊六、二四、松村眞澄録)

第二章 大地 震 (八六八)

國依別の立去つた跡のエリナは、掌中の玉を何者にか奪はれたるが如き心地し乍ら門に立出で、宣傳使の姿の廣き原野に見えなくなる迄打見まもり

エリナ「ア、御親切な御方であつた。さうぞモウ暫く居て下さればよかつたに……俄に御機嫌を損ねたと見えて、さうく歸つて了はれた。最早此上は三五の神様に見放されたに違ない。ヤツバリ昔から信仰して来た常世神王様を、一心不亂に信仰致しませう。お父さんが日暮シ山の牢獄に囚はれて、あるにあらぬ責苦に會ひ、お苦しみ遊ばすのも、其元を尋ねれば、ウラル教の神司であり乍ら、プールの教主様が常に異端とし、外道としてお嫌ひ遊ばす三五教の宣傳使を我家に泊めたり、又ウ

ラル教の信者に對し、異端外道の教を御歎め遊ばした天罰が齎つたのであらう。何程誠の教でも、常世神王様に仕へて居る以上は、二心を出して他の神様を信仰すれば、神罰が當るのは當然だ。ア、是から心を改めて、常世神王様に對し、心の底よりお託を致し、主一無適の信仰を捧げませう。……あ、常世神王様、吾々教子の重々の罪、何卒御赦し下さいませ」

と言ひ乍ら、家に入り、母親の枕許に進み寄り見れば、母親は少しく頭を擡げ、ニコニコと笑ひ出した。

エリナ「ア、お母アさん！ 大變に御氣分がよさそうに御座いますなア。こんな嬉しい事は御座いませぬ」

母「お前は餘り両親を大切に思ふ真心より、遂にウラル教の有難い事を忘れ又お父うさ

んの様に三五教の宣傳使を我家に連れ歸り、外道の神様を信仰なさるものだから、私も又もやプールの大將に睨まれ、お前と私とが、再びお父さんの様に、水牢の責苦に會はねばならぬかと、それが心配になつて、病氣はだん／＼重る計り、心の中で……常世神王様、どうぞ一時も早く宣傳使が歸つて呉れます様……と、祈願をこらして居りました。おかけに依つて外道の宣傳使、吾家を立出で、姿を見せなくなつたので、ヤツと安心し、俄に気分も良くなつて來た。モウ是からどんな事があつても、外道の宣傳使を吾家へ連れて歸る事はなりません。お前は親を助けようと思つて焦り、却て、外道に迷ひ、親を苦しめる様な事になるから、どうしても斯うしても常世神王様の教を疏外し、外道に迷はぬ様に心得て下されや。おかけは忽ち此通りだから、神様が種々として、吾々親子の信仰の厚薄を御試し遊ばすのだ

から、チツとも油断はなりませんぞね」

エリナ「ハイ、現当利益と言ひ、お母アさんのお言葉といひ、只今限りスツバリと心を改め、決して外の道へは迷ひませぬから、御安心下さいませ」

母「あ、それを聞いて私も安心しました。サア早く常世神王様に御禮を申上げてお呉れ！」

エリナ「ハイ、只今直に感謝の詞を捧げませう」

と言ひ乍ら、庭先を流る細谷川に身を清め、衣類を着替へ、恭しく感謝祈願の祝詞を奏上しつゝあつた。

かゝる所へ日暮シ山のプールの使として、アナンは四五人の部下を引つれ、此家に荒々しく入來り、いとも聲高にエリナに向ひ

アナン「オイ、エリナとやら、貴様は又しても、三五教の神司を我家に引入れ、朝夕…親の病氣を直さうと云か、父の危難を遁れさせ玉へと云つて、祈らして居つたではないか？ 近所の者の注進によつて、何も彼もスツカリと教主の耳に這入つてゐるぞ！ それにも係はらず、三五教の亂暴者キジ、マチの兩人を差向け、聖場を蹂躙せんと致した圖太き代物……サア教主の命令だ、尋常に手を廻せ。日暮シ山の館に連れ歸り、其方もエスの様に水牢に投込み、戒めてやらねばならぬ」

と鼻息荒く嘔鳴りつけた。母親はアナンの聲を聞いて又もや心を痛め、猛烈なる癡氣を起し、其場に「ウン」と倒れて了つた。エリナは身も世もあらぬ心地し乍ら、こわく手を仕へ

エリナ「これはくアナンの大將様、能くこそ御入來下さいました。御存じの通り、父は館に囚はれ、跡に残つた一人の母は此通りの大病、今私が引つ立てられて参りましたら、あとに誰が母の世話を致す者が御座いませう。是非行かねばならぬ者なれば深く参りますが、さうぞ此母の病氣が直りますまで、御猶豫を願ひます」

アナンは烈しく首を左右に振り

アナン「あゝイヤ、其事許りは罷り成らぬ。一時も早く汝を召捕來れよとの嚴命、到底吾々の獨斷にて其方に猶豫を與へる事は出来ない。何と云つても引捉へて歸らねば、此方の役目が濟まぬ。さうして三五教の宣傳使は何時此處を立つたか？」

エリナ「只今御立ちになりました」

アナン「そうだらう。最前歌を唄つて行きよつたのが、神力無双の國依別だらう。彼奴が居やがるぞ、チツと此方も都合が好くないのだ。二三日前から、此家を遠巻に巻

いてゐたのだ。サアもう斯うなる上は、泣いても悔んでもおつつかぬ。キリ／＼と手をまはさぬか」

エリナは自棄氣味になり、容を改め、悪胴を据ゑ

エリナ「コレ、アナンさん！ お前さんも餘程良い腰拔だなア。日暮シ河では脆くも一人の宣傳使に追ひまくられ、又たつた一人の國依別が恐ろしうて、二晩も三晩も、此暑い、蚊の喰うのに、頼みもせぬ私の家の夜警をして下され、溢茶の一杯も進ぜるのが道かは知りませぬが、餓鬼にやる茶があつても、お前さん等に吞ます茶はありませぬワ。そこに谷川の水が流れてゐるから、それなつと呑んで、モウ一きり御講演を願ひます。ラツバ節でも法螺貝節でも構ひませんワ。お母アさんの冥途の土産に、一つ力一杯吹き立て下さい」

アナンはクワツと怒り、巨眼を見開き

アナン「コリヤ女！ 譬々難なき汝の雜言無禮、最早開捨はならぬぞ」

エリナ「お父うさんはお前たち悪人の爲に囚へられ、お母アさんは此通りの重病、たつた今の先、餘程快方にお向ひ遊ばし、ヤツと安心する間もなく、お前がここへふん込んで大聲を出し、お母アさんを最早取返しのならぬ様な重態におとして了ひよつた以上は、お母アさんの御壽命も今日一日が保ちかねる。そうならば此エリナは最早自棄くそだ。たかが男の五匹や十匹、何が恐ろしい……國依別の宣傳使より神變不思議の神力を授かり、最早立派な三五教の女宣傳使だ。指一本でも觸へるなら、見事觸へて見よ」

と嗷鳴り立て、睨み付けてゐる。其權幕に流石剛情我慢のアナンも辟易し、エリナの

顔を見つめて稍不安の念に沈んでゐる。母親は「キヤア」と一聲悲鳴をあげた儘、絆切れて了つた。エリナは驚いて

エリナ「お母アさま！モ一度物を言うて下さいませ……エリナで御座います」

と死骸に取付き、あたり構はず泣き叫ぶ。アナンは今こそと、手早く捕縄を取出し、エリナの首にひっかけようとする刹那、俄に轟々ガタ／＼と凄じき物音が聞けて來た。驚いて、アナンを始め一同は戶外に駈出せば強烈なる大地震であつた。アナンを始め四五人の捕手は生命カラ／＼、轉けつまるびつ、當世神王の祠の前を指して、四這になり乍ら逃げて行く。

地震は益々烈しくなつて來た。エリナは母親の死体を抱けて外へ飛出さうとする途端、家はメキ／＼と音を立て、バサリと倒れた。エリナは止むを得ず、身を以て

逃れた。忽ち火を失ひ、エリナの家は火煙濛々として立上り、母親の死体は惟神的に火葬に附せられて了つた。上下動の激震は刻々に烈しく、エリナは松の木一株にシカと抱付き、目を塞いで、地震（テルトレーモ）の歌むのを待ち乍ら、一心不乱に「國治立大神守り玉へ幸はへ玉へ……」と祈念をこらした。……漸くにして地震はやんだ。エリナはホツと一息し乍ら、ここに居つては又何時捕手の襲ひ來るやも計られずと、俄に國依別の宣傳使が戀しくなり、ヒルの都を指して一目散に走り行く。ヒルの都を遠く見下ろせば、大激震の爲火災起り、火は天に沖し、空の雲迄眞赤に焼けてゐた。

（大正一一、八、一八、舊六、二四、松村眞澄録）

第三章 救世神 (八六九)

天氣晴朗にして

蒼空一點の雲翳もなく

士農工商は各其業を樂み

常世の春を祝ひつゝ

或は娶り或は舞ひ歌ひ

山河は清くさやけく

樹木は天然の舞踏をなし

溪流は自然の音樂を奏し

鳥は梢に唄ひ蝶は野に舞ひ

花に戯れ、嬉々として舞ひ遊ぶ

平安無事の天地の現象

さながら神代の如くなり

瞬く間に一天俄に掻き曇り

滿天墨を流せし如く

洋々として

空を翔る諸鳥は

忽ち地上に向つて

矢を射る如く落ち來る

大地忽ち震動し

天國淨土は忽ちに

地獄餓鬼道

修羅の巷と一變し

時々刻々に大地の震動

猛烈を加へ

山は崩れ、原野は裂け

民家は倒れ橋梁忽ち墜落し

彼方此方に炎々

天をこがして燃わあがる

空前絶後の大火災

身の毛もよだつ凄じさ

神の恵の天國も

天の下なる神人が

倭け曲れる魂や

醜の言靈重なりて

妖邪の空氣鬱積し

天地主宰の大神の

大御心を曇らせて

憤むべきは世の人の

心の持様一つなり

此れの慘状見るにつけ

神の尊き御心を

いよ／＼茲に天地の

心を直し行ひを

尊き昔の物語

あゝ惟神々々

遠き神代に住まひたる

忽ち起る天變地妖

耳に鼻、口、村肝の

あゝ惟神々々

高砂島の國人は

完美に委曲に体得し

神の權威に畏服して

改め神に仕へたる

神のまに／＼述べ立つる

神の御靈の幸はひて

高砂島の人々は

云ふも更なり天の下

きらめく星の数の如

昔の事と思はずに

轉迷開悟の栞に

神の御子と生れたる

そも／＼神は萬物に

人は天地の御水火より

尊き神の肉の宮

發揮し玉ひて天地を

生れ來りし人の身の

四方の御國に大空の

生れ會ひたる人々は

心を清め身を清め

心に刻みて惟神

我天職を盡せかし

普遍し玉ふ神靈ぞ

生れ出でたる神の御子

皇大神の神力を

開かせ玉ふ司宰者

其天職を諦めて

誠の神に服せよや

旭は照る共曇る共

月は盈つ共虧くる共

假令大地は震ふ共

山裂け海は濁く共

此世を造り玉ひたる

神の御前に真心を

盡しまつりて人たるの

努めを盡せ 惟神

神は吾等と共にあり

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

汚れ果てたる人の身も

罪を見直し聞直し

宜り直します天津神

國津神達八百萬

國魂神を始めとし

吾等を親しく守ります

産土神を敬ひて

此美はしき天地に

暴風洪水大火なく

饑饉戰爭病氣なく

四海同胞の神慮をば

朝な夕なに省みて

神の依さしの天職に

盡させ玉へ祈れかし

あゝ 惟神々々

御慶幸はひまませよ。

ヒルの都の楓別命の妹に紅井姫と云ふ容色並びなき、今年十九の春を迎へた美人があつた。日暮シ河の水は大に減少し、數多の激湍たる鮮魚は何れも下流のヒルの都附近に、大部分集まり、鶺鴒の遊びは晝夜の區別なく、盛に行はれた。紅井姫の侍女として仕へまつれる、アリー、サールの二女は館の内事を司るモリスと共に一度此鶺鴒の遊びを試みたく希望してゐたが、何と云つても勤めの身の上、自由にならぬ悲しさに、折ある毎に紅井姫の前に出で、日暮シ河の鶺鴒の最も壯快なる事を

話した。紅井姫は侍女の面白さうな話に稍心を傾け、自ら兄の楓別命に向つて一日の清遊を許されん事を請うた。楓別命は何時も深窓にのみ在りて、外出せざる紅井姫のたまくの希望なれば、否むに由なく、快く之を許し、内事の司モリスを始め、アリー、サールの侍女を従へ、其他四五の従者と共に、城外を流る、日暮シ河に鶉飼の遊びを許した。

茲に紅井姫は天にも昇る心地して、モリス以下を従へ、鶉飼の遊びを終り、數多の鮮魚を生捕り、勝誇つたる面色にて城下に歸り來る折しも、俄に天地震動し、大地は上下左右に動搖し始め、家屋はベタベタと將棋倒しになり、紅井姫の一行も亦市内の家屋に壓せられて了つた。

火災は各所に起り、忽ちヒルの都は阿鼻叫喚の巷と化した。斯る所へ宣傳歌を歌ひ乍ら悠々として進み來る一人の宣傳使があつた。それは國依別の宣傳使であつた。兩側の家屋は街路に無慘にも滅茶々に倒れ、火は追々に前後左右より燃へ來る其物凄さ。忽ち煙に包まれて、一尺先も見えなき迄に至つた。……………足許に聞ゆる女の悲鳴、國依別の宣傳使は、其聲を目當てに探り寄り、押へられたる柱を剛力に任せて取り除き、何人かは知らね共、矢庭に脊に負ひ

「天津神、國津神、國魂の神、産土の神、一時も早く此慘狀を助け玉へ……………」と祈りつ、宣傳歌をうたひ、煙の中をかきわけて、ヒルの都の中央に下津岩根の岩石の布き並べたる自然の要害地、楓別命の神館に思はず知らず走せ着いた。

國依別はヤツと胸をば撫で卸し、女を脊より其場におろした。

女「何處の方かは存じませぬが、危き所御助け下さいまして、有難う御座います。全

「あなた様は妾の命をお助け下さいました誠の生神様で御座いませう」

と感謝の涙を絞り、手を合せ伏し拜む。國依別は言葉静かに

國依「私は三五教の宣傳使で御座います。これの神館にまします楓別命様に一度お目に掛りたく、遙々尋ねて参る途中に於て、今の大地震害、思はずあなたを御助けしたのも、全く神様の御引合せで御座いませう。御禮をいはれては却て迷惑に存じます」

女「妾は楓別命の妹紅井姫と申す者、日暮シ河の鵜飼遊びの歸るさ、思ひもかけぬ大地震の厄に遭ひ、命危き所、あなたに助けられた者で御座います。サア早く御通り下さいませ。兄もさぞ喜ぶ事で御座いませう」

國依「あ、左様で御座いましたか。不思議な御縁で御座いますなア。併し乍ら……アレ御覽なさいませ。四方の山々は盛に噴火を始め、黒雲天を封じ、地は裂け、各所より濁水を吐き出し、早くも低地は大洪水となり、人々の泣き叫ぶ聲は、刻々に高まりて参りました。私は是より珠の玉の神力を以て、此天變地妖を鎮め、萬民を助けねばなりません。貴女はどうか早くお館へ御這入り下さいませ。後程参りますから……」

紅井「左様ならばお先へ失禮致します。キツと御待ち申して居りますから、必ずお這入り下さいませや」

と云ひすて、館の内へ慌だしく駆入つた。國依別は一心に

國依「國の大御祖國治立命、豊國姫命、國魂の神、一時も早く此地異天變を鎮め、青人草は申すも更なり、一切の生物を御救ひ下さりませ……」

と念じ、全身の靈力を籠め、天の數歌を聲高々と宣りあげ、「ウー／＼」とウの言靈を發射すれば、不思議や大地の震動忽ち休止し、諸山の噴火は従つて止り、噴出する洪水はビタリと止まつて、見る／＼内に減水し始めた。言靈の伊吹の力著しく、満天を包みし黒雲は拭ふが如く晴れ渡り、歡喜の太陽は煌々として中天に輝き、下界の慘狀を憐れけに照し玉うた。

楓別命は高殿に上り、此慘狀を救はんと、一心不亂に紅井姫の身の上の事などは、スツカリ念頭より忘却して、只々天下萬民の爲に祈願をこらしつゝあつた。

斯かる所へ國依別の宣傳使現はれ來りて、天津祝詞や生言靈を圓滿清明に宣り上げければ、一切の地異天變は言靈の神力に依りて、再び安靜に歸し、天日の光りを仰ぐに至つたのである。ア、惟神、惟神、生言靈の神力、實に尊さの限りと云ふべし

である。

紅井姫の報告に依り、楓別命は驚喜し乍ら、慌だしく國依別が立てる前に來りて、其神力を感賞し、且つ

楓別「紅井姫の命を救ひ玉ひし事の有難さよ、御禮は言辭に盡し難し………」
と感涙に咽び乍ら、國依別を伴ひて、奥殿指して進み行く。

先づ第一に國依別の言葉を容れ、非常時の爲にて、蓄へおきたる五穀の倉を開き、楓別命、國依別、紅井姫を始めとし、秋山別、科山別は駿馬に跨り、城下を隈なく駆け巡り、大音聲にて

「市中の人々よ、一刻も早くヒルの城の神館に集り來れ。汝等一同を助け遣はさん！」

市中隈なく、泥濘の道を駆け巡つた。柱に壓せられて半死半生となりし者、水に溺れて、早くも死亡せし者、火に焼かれたる者など、其惨状目も當られぬ計りであつた。

楓別命は秋山別、科山別に命じ、俄に館内の男女をして炊き出しをなさしめ、日夜救済に努め、負傷者は鎮魂を以て之を治しやり、普く數多の人々に仁惠を施し、國依別の神力と楓別命の仁愛の真心は治く國內に喧傳さる、事となつた。是より國依別は楓別命の勸むる儘に、暫く神館に足を止め、數多の國人に神教を新に傳ふる事となつた。今迄ウラル教やバラモン教を信じ居たる人々も、此度の地異天變に依つて、三五教に救はれたるを心の底より打喜び、國內舉つて、三五の誠の信徒となつて了つた。

(大正十一年八月十八日舊六月廿四日松村眞澄録)

瑞 月

我身をばキリストなりと崇めつゝ

生命捨てんと云ふ人ぞ憂し

第四章 不知戀 (八七〇)

國依別は楓別命の懇望に依つて、暫時此處に止まることゝなつた。併し乍ら日暮シ山の岩窟に遣はしたるキジ、マチ兩人を始め、エスの消息を案じ煩ひ、如何にもして此館を立出で、一刻も早く彼の消息を探り、救ひ出さんと焦慮してゐた。されど數多の人々神の如くに尊敬して集まり來り、此度の大地震に依りて、負傷をなしたる諸人、或は輿に昇ぎ、或は戸板に乗せ、救ひを求めに來る者、日々幾百人ともなくありければ、國依別も此慘狀を見棄て、立去る譯にも行かず、惱める人々に向つて鎮魂を修し、之を救ひつゝ、思はず知らず時日を過ぎすことゝなつた。

九死一生の難關を助けられたる紅井姫は、これより國依別に對して、一種異様の愛慕の念が、刻々に雲の如くに起り來り、最早情火にもやされて胸は苦しく、ハアはト鼓の波を打ち、熱き息をハア／＼と吐き乍ら、まだ初戀の口に云ひ出しかねて、肩で息をなし、遂には思ひに迫つて、身は瘦衰へ、色青ざめ、病床に呻吟することゝなつて了つた。

楓別命は紅井姫の病氣を眺めて、大に憂慮し、如何にもして快癒せしめんかと朝な夕な神前に祈願をこらしつゝあつた。アリ、サールの侍女も、一刻も紅井姫の傍を離れず、晝夜心をこめて看護に盡すと雖も、姫の病は、日に重り行くのみであつた。

國依別は姫の重病を聞き、鎮魂を以て病を救ひやらんと、ワザ／＼病床に姫を訪うた。姫は國依別を聞いて、重き頭を掻け、顔赤らめ乍ら、少しく俯伏目になつて、盜

むが如く、國依別の顔を眺め、微笑をもらし、愉快けに、両手を合せて感謝の意を表した。

國依別は紅井姫の枕頭に端座し、天津祝詞を奏上し、天の數歌を誦ひ上げ、姫に向つて慰安の言葉を與へ乍ら、しづくと此場を立出で、與へられたる吾居間に歸りて再び神に祈願をこらしつゝあつた。

楓別命に仕へて信任最も厚く、數多の信者の人望を集めたる秋山別は、紅井姫の色香妙なるに心を寄せ、日にく慕る戀慕の心に胸をこがし、機會ある毎に、姫の歡心を買はんも、心を配りつゝあつた。

又内事の司たるモリスは紅井姫に接見の機會多きに連れて、いつしか姫の美容に心を蕩ろかし、將來紅井姫の愛を一身に集中する者は、吾れならむと、深くも心中に期待しつゝあつた。此度の姫の重病につき、真心の限りを盡し、其歡心を買はんものモリスは内事の勤めをおろそかにし、暇ある毎に、病氣見舞や看護（フレゴ）を口實に姫の寢室を訪ふことを以て、唯一の神策として居た。

一方秋山別も同じ思ひの戀慕の情火消し難く、見すほらしく瘦衰へたる紅井姫の寢室を、朝夕何時となく尋ね來りて、真心のあらん限りを盡し、姫が全快の後は一日も早く、合衾の式を舉げんものと、心中深く期待しつゝあつたのである。

然るに國依別の此館に來りしより、紅井姫が秋山別に對し、又モリスに對する態度はさうことなく冷やかになりしが如く思はれて、二人は煩悶の淵に沈み、如何にもして姫の信用を恢復せんと、心の中の曲者に驅使されて、巧言令色追從の限りを盡す可笑し

紅井姫は最初より、秋山別、モリスに對し、只普通の教の道の役人、又は内事の用を勤むる取締として、優しく交際してゐたのみである。二人に對し、夢にも戀愛の心は持つてゐなかつた。されど二人の男は、紅井姫の優しき言葉を聞く度に、我れを愛するものと思ひひがめ、三國一の花婿は秋山別を措いて、他に適當の候補者はなしと、自ら自惚鏡に打向ひ、鼻を掻かし、當てなき事を頼みとして日を暮しつゝあつた。内事司のモリスも同様に、將來の紅井姫の夫はモリスならめと、自ら心に定めて、吉日良辰の一日も早く來らん事を期待しつゝあつたのである。

秋山別は此頃モリスの姫に對する態度の何となく怪しげなるに、心を痛め、法界格氣の角を生やしかけてゐた。又モリスも秋山別の姫に對する態度の目立ちて親切なるに心をいらち、戀の仇敵として、油断なく秋山別の行動を監視つゝあつた。そうして我藥籠中のものとなし、互に其輸贏を争ひつゝ、潜かに愛の競争を續けてゐたのである。

斯かる所へ、天下の神人活神と尊敬せられたる國依別命、紅井姫の九死一生の危難を救ひてより、姫の信任目を逐うて厚くなりければ、二人の心中は常に悶々の情に堪へかね、國依別の欠點を探り出し、楓別命の教主を始め、紅井姫の前に曝露して、其信任を傷つけ破らんと、二つ巴の兩人は戀の炎を燃やしつゝ、巴の如く相互に暗々裡に弾劾運動の準備に着手しつゝあつた。されど國依別は素より女に對し、少しも執着心もなく、又紅井姫に對し、怪しき心は毫末も持つてゐなかつた。それ故國依別は、何の憚る所もなく、只姫の大病を救はん爲に心の底より案じ過して、神に

祈り、屢病の経過を探るべく、姫の寢室を、晝となく夜となく訪れたのである。

國依別の此行動は、戀に囚はれたる瘦犬の秋山別、モリスの目には、非常なる苦痛を感じ、遂には仇敵の如く見做すに至つたのである。

折柄玄關に訪る、一人の女があつた。モリスは忽ち吾居間に招いて、其來意を尋ねた。

女「三五教の宣傳使國依別様は、御館に御出で、御座いますか？ アラシカ峠の麓からエリナと云ふ女が訪ねて参りましたと、若しお出ならばお傳へを願ひます」

モリス心の内にて

モリス「ハ、ハ、此奴は國依別のレコだなア。良い所へ来て呉れた。モウ斯う秘密が分つた以上は、何程紅井姫様が國依別に御熱心でも、女があると聞けば、千年の戀も一

度に醒めるだらう。一つ甘く調子に乗せて、腹の底を探つてやらう……」

と決心し愛想よく

モリス「それは、能う訪ねて来て下さいました。大變な大地震で御座いましたが、御宅は大した事は御座いませんかな」

エリナ「ハイ有難う御座います。あの大地震で小さい乍ら住家は倒され焼かれ、一人の母は地震と火事の爲に無くなつて了ひました。實に不運な女で御座います」

と早涙含む。

モリス「それは氣の毒な事でした。御察し申します。併し乍ら、老人と云ふ者は何れ先へ死ぬものです。一番芽出たい事と言へば、ない死に、婆死に、爺死に、婿死、子死に孫死と申しまして、こんな芽出たい事はないのですよ。先に死ぬべき者が先に

死ぬのは當前、老人が後に残り、若い者が先に死んで御覽なさい。年が老つて脛腰が立たんようになり、尿糞のたれ流しと云ふやうな惨酷な目に會うても、若い者が先に死なつて了へば、誰も親身になつて世話して呉れる者もありますまい。それにお前さんは、國依別さんと二人若夫婦が残つたのだから、斯んな目出たい事は有りませぬ。人はすべて思ひようですから。親の代りにドシ／＼とお正月の餅搗をして、子餅を澤山に、天の星の數程拵へなさい。それが一番神様へ對しても御奉公だ、アハ、ハ、ハ、」

エリナ 「私は決して國依別様の女房でも何でも御座いませぬ。只私の母が急病で困つて居りますので、常世神王の御社へ參拜して居りますと、そこへ國依別の宣傳使が二人の家來を連れて現はれ、御親切に私の宅へ來て……お前の母の病氣平癒の祈願を

してやらう……と仰つたので、五六日泊つて頂いた丈のもので御座います」

モリス 「さうして二人の家來は如何なつたのです？」

エリナ 「二人の御家來は私の父の或處に囚へられてゐるのを助けると云つて出て行かれました限り、今に何の便りも御座いませぬ。大變に案じて居りまする」

モリス 「ハ、ー、さうすると、二人の家來をさつかへまいておいて、國依別さんが、人も通らぬ山道を、國さんとエリナさんと手を引いて通らうかいな、二人の仲はよいけれど、二人の奴が邪魔になり、用を拵へ、まいてやつた……と云ふ様な……そこは要領宜しくやつたのでせう。私は斯う見ても、そんな事に粹の利かぬ男ぢやありません。ごんな御取持でも致しますから、ハッキリと貴女の御婚しい芝居の顛末を話して下さいな。其都合に依つて國依別さんへ御取次を致しますから……」

エリナ 「決して左様な關係は御座いませぬが、あの宣傳使様の仰有つた御言葉を思ひ出し、御神徳を慕つて遙々此處まで参りましたので御座ります」

モリス 「ハ、、、一口仰有つた御言葉を思ひ出して慕うて来た云はれましたなア。蜜のような甘い言葉でしたらう……コレ、エリナ、私は是れからヒルの都へ往て来る程に、お前と私と斯うなつた上は、旭は照る共、曇る共、月は盈つ共、假令大地は沈むとも、お前の事は忘れやせぬ、二世も三世も先の世かけて、切つても切れぬ誠の夫婦、假令身は東西に別れて居つても、魂は尊いお前の側……なんて甘つたるい事を言つたのでせう。お羨ましく御座いますワイ。あんたも中々おどろしきうな顔して、随分やりますな。陰裏の豆でも時節が来ると花が咲き初めますからなア、アハ、、、」

エリナ 「そう、ちらさすと御頼みですから、早く取次いで下さいませ」

モリス 「取次がぬ事はないが、併しお前さんに取つて、此間の地震よりも、大火事よりもビックリな事が出来て居りますよ。命迄はめこんだ國依別さんには、此お館の名高い紅井姫さまが、ソツコン惚込んで戀病を煩ひ、國依別さんに朝晩目尻を下けて涎をくり、それはく見られた態ぢやありませんか。そして、姫様も姫様ぢや……お前さんのやうな、一寸立派な奥さんがあるにも係はらず、人の男に惚て、戀病を煩ふなんて、本當に怪しからぬぢやありませんか。……コレ、エリナさん、お前さんも一人前の女ぢやないか。のめく大事の夫を世間見ずのお嬢さんに占領せられて、如何して女子の意地が立ちますか。サア私が案内して上げるから、姫さんのお部屋に立入り、國依別さんの胸倉をグツと取り思ふ存分不足を言ひなさい。

若しも外の奴が寄つて来て、亂暴者だとか何んとか云つて取押へようとしよつたら内事の司をして居る私がグツと抑へて、何事も言はさんよつて、一つ大騒ぎをやりなさい。さうすれば如何に惚たお姫さんでも愛想をつかし、國依別さんを思ひ切つて返して呉れるに違ない。是が六韜三略の兵法だ。サア何よりも決心が第一だ。直接行動に限りませぬ。……何ちやお前さん、肝腎の夫を取られ乍ら、氣樂相な顔して笑つてゐると云ふ事があるものか。さういふ薄野呂だから、大事の男を取られて了うのだよ。犬でもケシをかけねば猪に飛びつかぬもんだ。まだ私のケシ掛けよ
うが足らんのかいな」

エリナ 「ホ、、、あなたの仰有る事は大變に混線致して居りますよ」

モリス 「何分自轉車や自動車の交通瀕繁の爲、電話線に響くを見れて、少々混線して居

りますワイ。混線と云つたら、國依別さんの事だ。お前に對してもまだ幾分か未練はあろうし、お姫さんに對しては命を投出して苦しいもないと云ふ惚け方、そこへ向けて、秋山別と云ふ戀の強敵が現はれて居る。まだ外に二人……競争者がある随分混線したもんだ。其混線序に、お前さんが口から火を吹き、角を生やし、鬼か蛇になつて、お姫様の部室へ飛び込みさへすれば、私の望みもオツトドツコイ、お前の望みも成功するぞ云ふものだ。サア早く決心の次第を聞かして下さい」

エリナ 「そんな事仰有らずに、どうぞ會はして下さいなア」

モリス 「會はして上げたいは山々なれど、自分の男を人に取られて、平氣で居るやうな腰拔は能う會はしませぬ。どうぞ歸つて下さい、左様なら……」

「と一間に隠れようとする。エリナはコリヤ一通りでは取次で呉れぬと心に思つたか、

俄に聲を變へ

エリナ 「エー残念やな、大事のく可愛い男、人にムザく盗まれて、私も女の意地、コレが黙つて居られうか。これから奥へふん込んで、國依別さんのたぶさをつかみ、恨みの數々述べ立て、姫さんにもキツイ御禮を申さなおかぬ」
と地團駄ふみ出した。モリスはシテやつたりと引返し

モリス 「ヤア天晴れく、あなたの武者振り誠に勇ましよう御座る。サア是よりモリスが先陣を仕り、天晴れ、紅井山の先頭に功名手柄を現はし、國依別を奪ひ返し、一時も早く凱歌をあけて、ヒルの館を立出でなされ。然らば御伴仕りませう」
と大手を振り乍ら

「サア古今無双の女豪傑エリナさん、モリスが後に従つて十分決心を定め、鉢巻の

用意をして、ドシく足音高くお進みあれ」

と先に立つて、姫が病室指して進み行く。

(大正一一、八、一八、卷六、二四、松村眞澄氏)

瑞 月

教主を崇むるために皇神の

光り忘るゝここの歎てき

第五章 秋鹿の叫(八七一)

紅井姫は命にも代へて戀ひ慕うて居た初戀の國依別に介抱され、其嬉しさに病氣は段々と軽くなり、殆ど全快に近付いた。紅井姫はまだ十九才の花盛り、國依別は早くも四十の阪を三つ四つ越してゐた。されど球の玉の神徳にてらされて、元氣益々加はり、血色よく、一見して三十前後の若者とより見わたかつた。紅井姫は侍女を遠ざけ只一人、心淋しゆに一絃琴を弾じ、心の丈を歌つてゐる。

紅井姫「天と地との水火をもて

生れ出でたる人の身は

如何でか神の御恵み

蒙らずしてあるべきや

秋野にすだく虫の音も

木々に響る百鳥の

長閑な聲もをし並べて

戀を語らぬものぞなき

戀路に迷はぬ者あらむ

心の底の奥山に

清く照りはふ紅井の

紅葉の色に憧がれて

妻戀ふ鹿もある世の中に

國依別の神さんは

さうして斯くも情ないぞ

此方が思へば先方の方で

思ひ返さぬ戀の暗

迷ふ我らの苦しみを

折ある毎に打明けて

語らむものと思へ共

女心の耻かしく

汝が御身を思ふとは

思ふ人にも思はれじと

思ふは誰を思ふなるらむ

あゝ惟神々々

結ぶの神の幸はひに

紅井姫が眞心を

夢になり共知らせたい

遠くまはして知らせ共

巖の如く頑として

犯しがたなき其心

汝が身の爲には我命

屍を曝す世あり共

汝が命の御口より

うつさせ玉へ紅井の

知らぬ顔する恨めしさ

國依別の御前に

目ひき袖ひきいろく

野山の諸木か川の石

齒節も立たぬ國依別の

益々募る戀の意地

假令野の末山の奥

なごか厭はむ一ことの

優しき言葉の花の色

姫の命の眞心を

それに引替へ朝夕に

執念深くも附け狙ふ

内事司のモリスまで

秋波を送る厭らしさ

生命かけての紅井の

少しも響かぬつれなさよ

御蒙幸はひまし〜て

縁を結ばせ玉へかし

一日も早く皇神の

思ひ切らせて玉へかし

男と生れ女子と

厭な男の秋山別や

言葉巧に言ひ寄りて

戀しき人は知らぬ顔

我言靈も木耳の

金勝要大神の

添ひたく思ふ國依別の

うるさき二人の戀心

尊き御稜威を現はして

あ、惟神々々

生れ來るも神の世の

深きゑにしのあるものぞ

今に妻なき國依別の

神の司よ紅井の

姫の命が初戀を

叶ひて汝と吾と二人

國魂神の御前に

手に手を取つて潔く

鴛鴦の契の禮參り

一日も早く片時も

思ひを叶へ玉へかし

あゝ、惟神々々

御慶幸はひましませよ」

と歌ひ終り、一絃琴を横に置き、木茄子の皮を剥き、一口喉をうるほし乍ら、又もや戀に惱みつつ、双手を組んで溜息をついてゐる。

國依別は數多の人々に鎮魂を施し、箱手すきになつたのを幸ひ、紅井姫の居間に休息がてらやつて來た。

國依

「紅井姫様、確に一絃琴の音が聞けて居りましたが、随分お上手で御座いますなア。さうぞ私にも聞かして下さいませぬか？」

此言葉に紅井姫は、最前の歌を聞かれたのではあるまいかと胸を激かせ、忽ち面部をバツと紅の色に染乍ら

紅井

「ハイ妾の手慰びを残らずお聞きになりましたか？」
と耻かしげに俯む。國依別は何げなう、無難作に

國依「イ、エ承はりませぬ。少しく手すきになりましたので、御機嫌を伺はふと思つて、長廊下を參りますと、あなたの御居間に琴の音が聞けて居ますので、さうぞ一つ聞かして頂きたいと思ひ、そこ迄參りますと、早くもお琴の音は止まりました。残念な事を致しましたよ。モ一息早く伺へば、妙音菩薩の音楽が聞かれる所で御座

いましたに」

紅井「ホ、、、」

と袖を顔に當て、耻かしげに笑ふ。

國依「姫さん、永らく御厄介に預りましたが、明日あたり、御暇を頂戴して歸らうと存じます。就ては明朝早くなりませぬから、あなたの御休眼中にお目をさましてもなりませぬから、是きりで暫くお目にかからないとも分りませぬ。ここで明日の御別れの御挨拶を致しておかうと存じます」

紅井姫は俄に顔色を變へ

紅井「エ、何と仰せられます。明日御歸りとは、そりや又餘りぢや御座りませぬか。妾がこれ丈……」

國依「永らく御親切に預りましたが、是から、ハルの國を渡りウツの國へ參り、言依別命様に會はなくてはなりません。それ迄に二三人の男を助けねばならぬ事が御座いますので、非常に心が急ぎますから、是非々々明日は出立を致さねばなりません。永らく懇意に預りましたが、生者必滅會者定離、會ふは別れの始めとやら、どうぞ是迄の縁と思召して下さいませ、貴女の御健全な様に日に日に御祈りを致しますから、御病氣の事なんか、必ず御心配なされない様に頼みます」

紅井姫は「エ、」と云つた限り、其場に驚いて倒れんとした。忽ち目は眩み、耳は早鐘をつき心臓の鼓動烈しく、不安の状態が現はれて來た。國依別は……ハテ困つた事が出來たわい……と稍心配して居る。紅井姫は忪へ切れなくなつたと見ね「ウシ……」と一聲其場に悶絶して了つた。國依別は驚いて、直に、姫の手を取り、指先

より息を吹きこみ、いろ／＼と介抱の結果、漸く姫は正氣づいた。

國依「お姫様、お氣が付きましたか。マア結構で御座いました。私も大變に心配致しましたよ。何事の御心配がお有りなさるか知りませぬが、世の中は如何しても、人間の思ふ様には行くものではありません。何事も神様の御心の儘によりならないものです。例へば夫婦の道だつて、添ひたひ／＼と思つてゐる女があつても、神の御許しがなければ添う事は出来ず、嫌いでならない女房を持つて、一生を不愉快に暮す者もあり、又好きな者同志が夫婦になり、一時は非常に楽しく暮して居た者が中途に邪魔が這入り、障害が出来なごして、破鏡の歎きを味はふ者も御座います。それだから人間は到底自分の思ふ様にならないものだと思つて居れば、何事も諦めが付くもので御座います」

紅井姫は根めしげに國依別の顔を見つめ、何か云はんとして口籠るもの、如く、上下の唇をピリ／＼と震はせてゐる。

國依別は紅井姫の脊を撫でさすり、いろ／＼と慰めてゐる。

此處へ俄に足音高く、隔ての襖を靜に荒く引あけて、ヌアと首を出した秋山別は

秋山別「ヤアお楽しみ所へ、行儀も知らぬ不作法者がやつて参りまして、何とも早面目次第も御座いませぬ。併し乍ら國依別さん、お前さんは誰に斷つて姫様の御居間へお越しになつたのですか。御病氣なれば兎も角も、此頃は最早全快遊ばし、お前さんの御祈念を御願する必要もなくなつた今日、何の爲、姫様一人の居間へ御出でになり、其上お手を握り、背を撫で、何と云ふ不作法な事をなさいますか。不義は御家の御禁制、サア／＼、此秋山別が現場を見つけた上は、如何に御辯解をなさら

うども、承知仕らぬ。今日限り此館をトットと退去なされ。ヒルの館の總取締秋山別が、職名に依つて申付けまする」

國依「これは心得ぬあなたの御言葉。私があなたの目からは不義者と見えますか？」

秋山「現に見ゆるも見ぬもない、今姫様の御體に手をさへたぢやないか」

紅井「コレ秋山別、人様に向つて、そうズケ〜と御無禮な事を申す者でない。妾が今急病を發し、苦んで居つた所を通りかゝつて苦悶の聲を聞き、助けに来て下さつたのだよ。どうぞお前も疑を晴らして御禮を云うて下さい」

秋山「何とお姫様、あなたも此頃は随分旅の方になられましたねわ。國依別さまのお仕込で、イヤもう秋山別もあなたの言葉には、へ、閉口致します」

紅井「コレ秋山別、お前は妾を旅の方と今言つたが、そりや又如何いふ譯だ。知らして

お呉れ」

秋山「中々此頃はお姫様もお口が上手にお成り遊ばし、御辯解が巧くて手に合はぬと言つたのですよ。アハ、、、」

國依「秋山別さん、必ず御心配下さいますな。私もいよく明日より出立致しますから、何分姫様もお弱い體、どうぞ氣を付けて上げて下さいませ」

秋山「仰せ迄もなく、晝夜の區別なく、姫様の御體を大切に保護を致す此秋山別、御注意は御無用で御座います」

と憎々しげに言ふ。

紅井「いよく明日は國依別様、お立ちで御座いますか。餘り意地くねの悪い秋山別がいつもあなたの御心を損ねまして、實にお氣の毒で申譯が御座いませぬ。是もヤツ

「パリ妾の罪で御座いますから、どうぞ秋山別が悪いとは思召さず、妾をお叱り下さいませ」

秋山「これはしたり、お姫さん、これ程親切に、身命を賭して貴女様の事計り思つて居る私を、意地苦根悪い男とは、チト聞わぬぢやありませんか。大方國依別さんに入れ智慧をして貰ひなされたのでせう」

紅井「其様な御無禮な事を云つてはなりません。何と云つても、妾は國依別さんが命がけの好きなお方、お前はゲヂよりも嫌ひだよ。總取締の役であり乍ら、お道の方はそつち除けにして、妾の側計り、間がな隙がな、厭らしい目附をしてお出でだから妾も穴でもあれば、お前さんが来る度に、這入りたい様な心持がして、病氣が段々重くなる計りだ。それで兄さんに一什一伍を申上げたから、今に秋山別を放り出し

て、外の者に入れ替へするから、暫く辛棒せよと仰有つたよ。モウ斯うなつては仕方がないから、包まず隠さず、露骨に言つて上げるからお前も良い加減に諦めたが良からう。女の部室へ男の来るものでない。サア早く彼方へお行き、御用が支てるぢやないか」

秋山「チヨツ、エ、仕方がない、何程親切盡しても、私の心は汲み取つて紅井姫かなア。ナニ此處を追ひ出されるのなら、モウ破れかぶれた、戀の叶はぬ意趣返しに、一つ國依別のドタマをからわつて、恨を晴らしてやらう」

と云ひ乍ら、傍の火鉢を取るより早く、國依別目がけて打つけた。國依別はヒラリと体をかはし

國依「アハ、、、危ない、秋山別さん、姫さんのお言葉を眞に受けては可けない

よ。口で悪言うて心でほめて、蔭の惚氣がきかしたい……と云ふ筆法だから、安心なされませ。何と云うても國依別は明早朝ここをお暇せなくてはならないのだからなア」

秋山別は嬉しさうに

秋山「國依別様、失禮を致しました。是も一時の狂言で御座いますから、必ず悪く取つて下さいますな。さうぞウーンとやられちや大變ですから、お腹が立ちませうが、さうぞそこは神直日大直日に見直し開直し、宣り直して下さいませ」

國依「左様な事で腹の立つ様な私では御座いませぬ」

紅井「さうしても、あなたは明日お立ちで御座いますか？」

國依「ハイ、折角お馴染になつて、實に残り多う御座いますが、神界の御用が急ぎます

から、今晚は楓別命様にトツクリと事情（ツイルコンスターンツ）を申上げ、

お暇を頂戴致す考へで御座います」

紅井姫は「アツ」ミ叫んで又もや其場に打倒れて了つた。

（大正一一、八、一六、舊六、二四、松村眞澄録）

第六章 女 弟 子 (八七二)

此亂痴氣騒ぎの最中に、意氣揚々としてモリスは國依別の居間を尋ね、姿の見わたるに、的切り此奴は紅井姫の居間に侵入し、脂下つてゐるに相違ない。エリナを伴ひ、足音高く、現はれ來り、ガラリと襖を引あけ

モリス「國依別様、お前様の女房がはるく尋ねてお出になりました。サアどうぞトツクリと楽しんでなさりませ」

國依別「ヤア、エリナ殿か、あなたのお母アさんは何うなりましたか。日々御案じ申して居りました」

エリナ「ハイ有難う御座います。どうく母はあの大地震に死なつて仕舞ました。今

は、父は御存じの通り、日暮山に囚はれ、たよる所もなき女の一人身、あなた様のお後を慕ひ、お世話に預りたいと存じまして、茲まで尋ねて参りました。どうぞ先日の御無禮をお叱りなく、憐れな妾、何卒お恵み下さいませ」

モリス「コレく、エリナさん、そんな他人行儀の事を云ふに及ばんちやありませんかお前さん……ソレ私の前で雄健びしたように、ここで一つ賣り出さんかいな。ヤツバリ可愛い夫の顔を見るにグニヤくになつて了ふから仕方がない。ヤツバリ女と云ふ者は男にかけたら弱い者だなア、アハ、ハ、」

秋山「姫様の御病氣、今此通り御昏倒遊ばして御座る所だ。何を氣樂な事を言つてゐるのだと」

モリス「ヤア姫様が御病氣だなア。コリヤ大變だ。ドレく私が介抱をして進ぜよう。

癡氣を起して御座るのだらう。こんな所へ國依別さんの奥さんがやつて来たものだから、益々大變だ。併し乍ら姫様も結句諦めがついてよからう。サア一つお腹を取つてあげませう……癡に嬉しい男の力、身が粉になるまで抱いて欲しい……何か何とか言ふ事がある。國依別さんだ都合が好いのだが、生憎奥さんの御臨檢だから、そうもならず……國依別さん、さぞお心の揉める事でせうなア」

とニヤリと笑ひ乍ら

モリス「コレ〜お姫様、内事司のモリスで御座います。サア氣をしつかりなさいませ

！」

紅井「エ、汚ららしい！」

と今迄性念を失つて居たと思つた大病人に、カ一杯横腹あたりを、脇鐵砲で打たれ、

肋の三枚目をした、かやられて「アッ」と其場に目を剝いて倒れて了つた。國依別は驚いて

國依「コレ〜お姫様、そりや餘り亂暴ぢやありませんか？」

紅井「國依別さま、あなたは妾を騙しましたね。獨身ぢやと仰有つたが、現に立派な奥様が訪ねて御座つたぢやありませんか。エ、残念ぢや口惜しい？」

と齒切をかねて狂ひまはる。秋山別は紅井姫の體をグツと抱ね、

秋山「モシ〜姫様、そう荒立ちなすつてはお體に障ります。どうぞ氣をお鎮めなさいませ。世の中は廣いものです。男の數も決して一人や二人ぢや御座いませぬ。そんな氣の狭い事を仰有るに及びませぬ。あなたに適當な男が此お館に一人や半分は居ますから、御世話を致します。どうぞお鎮まり下さいませ」

紅井「エ、お前は秋山別か、又してもく好かんたらしい、震ひが来る、退いてお呉れ！」

「云ひ乍ら、かよわき手に拳骨を固め、力一杯鼻つ柱を擲りつけた。秋山別は不意に鼻つ柱を打たれ、目から火を出し乍ら、ヨロ／＼とよろめき、モリスの頭の上にドスンと倒れた機みに尻を下した。モリスは夢中になつて、秋山別の畢丸を力一杯握りしめ

モリス「コリヤ國依別、貴様は女房のある身を持ち乍ら、神様の御規則に背き、箱入娘の姫様を誑らかしチヨロまかして、風紀を紊す大罪人、サア此玉さへ振れば、發情は致すまい、畢丸割去術でも施して去勢してやらうか」

と一生懸命に固く握りつめる。秋山別は眞青になつて「ウーン」と云つたきり、ふん

伸びて了つた。

エリナ「モシ國依別さん、さうかしてあけて下さらんと、息が止まりは致しませぬか」
國依「あ、さうですなア」

「云ひ乍ら、モリスの手を指一本／＼刀を入れて放させた。秋山別は漸くに氣が付き呆け面してボカンと口をあけて紅井姫の顔を恨めしげに眺めて居る。

紅井「あのマア厭な男、妾の顔に何ぞ付いて居りますか？」

秋山「ハイ、何だか知りませぬが、男の顔がひつついてますワイ。それもクの字が一番ハッキリ現はれ、次にアの字が現はれて居りますが、クの字は段々色黒くなりアの字が赤く花の様に現はれかけました。あのクの字の黒い事わいの」

紅井「又しても厭な事を云ふ男だ。サア早うあちらへお行き！汚らはしい、アラーは居

らぬか、サールは何處ぞ、早く箒を持つて来てお呉れ」

次の間に息をこらして控わてゐた二人の侍女は、箒と塵取を持つて現はれ、跪いて姫の手に渡した。姫は手早く其箒を取り、第一に秋山別に向ひ

紅井「わ、煩雜い男」

と云ひ乍ら狂人の如く髪ふり亂し、目を釣りあげ所構はず打拵れた。モリスは

モリス「コレ〜姫様、そんな亂暴をなさつては可いませぬ」

と立あがるを

紅井「ナニ此翠丸纏み」

と云ひ乍ら、又叩きつけた。二人は流石に手向ひもならず、コソ〜として我居間に引下つた。

紅井「お前さんは國依別さんの御家内でせう。永らく御厄介になりました、さぞお待兼ねでしたらう。サア大事の婿さまを伴れて、勝手にお歸りなさいませ」

國依「これはしたり姫様、そりや大變な考へ違ひ、此方はアラシカ山の山麓に御座るワラル教の宣傳使エスと云ふ方の娘さんで御座いますよ。フトした事から途中にお目にかゝり、二三日御世話になりましたもの、獨身主義の國依別に、女房があつて堪りますか」

紅井「あなたは世界を股にかけて御歩き遊ばす宣傳使様、うち見る島の先々、掻き見る磯の先おちず、若草の妻を至る所にお持ち遊ばし、神生み、御子生みを遊ばす丈あつて、随分巧に言靈をお使ひ遊ばします。妾も最早觀念致しました。妾の戀は眞劍で御座ります。つまり九寸五分式の猛烈な戀なれば、最早あなたに見放された上は

此世に生きて何の樂みも御座いませぬ。戀の病に悩み一生苦むよりも、一層此場であなたのお目の前で自害して相果てます。愚な女と一口にお笑ひ下さいますればそれを冥途の土産に嬉しう歸幽致します」

と隠し持つたる短刀を閃かし、ガワと喉につき立てんとする、國依別は驚き、直に飛びつき、姫の手を打叩いた。其途端に短刀はバラリと前におちた。國依別は手早く短刀を拾ひあげ、熱涙を流し乍ら

國依「あ、困つた事が出来て来たものだ。これと云ふのも、若い時に女泣かせや、後家倒し、家潰しを數限りなくやつて来た其酬るだらう……モシ／＼お姫様、私は今こそ斯んな殊勝らしい顔をして宣傳使になつて居りますが、私の素性を洗つたら如何な姫様でも愛想をつかされるでせう。随分と女を泣かして来た代物ですよ。こんな

男に心中立をしたつて直に放かされ、蟬の揚壺を喰はされますよ。どうぞこんな男の事は思ひ切つて下さいませ」

紅井「自分の事を自分で悪く仰有る、其正直なお心が妾には振ひつく程好で御座います果して此ニリナ様があなたの女房でないのならば、是非茲に御逗留遊ばして、妾に神様の教を聞かして下さいませ。お氣に入らぬ者を無理に女房にして下さいとは申しませぬ。お側においてさへ頂けば、それで満足致しますから……」

國依「それは困りましたねい。どうしても私は急にここを立たねばなりませんから、姫様のお側において頂く事は到底出来ませぬ。どうぞ思ひ切つて下さいませ」

紅井「そんなら、あなたのお弟子として、どんな所でも厭ひませぬからお伴れ下さいませ。お願で御座います」

エリナ「妾もさうぞお弟子として、あなたのお出で遊ばす所へお伴れ下さいませ。其代りに洗濯や針仕事は十分致しまして、御神徳が授かつたら宣傳も致します」

國依「あ、仕方がありません。そんならお二人共、一所に参りませう。併し乍ら紅井姫様、貴方は楓別命様のお許しを受なくてはなりません。お許しさへあれば、何時でもお伴を致しませう」

紅井「ハイ有難う御座います」

是より國依別は楓別命に暇を告げ、二人の女を伴ひ、神館を後に日暮シ山の岩窟に向ひ、エス、キジ、マチの三人の生命を救ふべく夜の明けぬ中より準備をして日暮シ山指して男女三人進み行く事となつた。

(大正一一、八、一八、番六、二四、松村真澄録)

第二篇 紅 禊 隊 (一五七)

第七章 妻の選挙 (八七三)

ヒルの館（たね）にゆくりなく

救すくひ助けし國くに依別よわべは

特別待遇（とくべつたいぐう）に思おもはずに

醜みにくの魔風まかぜに襲おそはれて

戀こひの情なさけの手に囚こらへられ

苦くるみ悶もだゆる折柄（せがら）に

エリナの尋たずね來きたりしゆ

漸おそく幕まくらを切上きりあげて

現あらはれ來きたりて諸人（しよじん）を

楓別（あきのわかれ）の戀篤こんじくな

あらぬ月日（つきひ）を送おくりつゝ

紅井（くわい）姫（ひめ）の執拗しつごうな

進退（しんたい）こゝに谷（や）まりて

アラシカ山（やま）の麓（ふもと）なる

ヤツサモツサの騷動（さわどう）も

紅井（くわい）姫（ひめ）やエリナをば

教の弟子とさし許し

館の主に懇懇に

暇を告げて宣傳歌

歌ひて此處を立出づる

一男二女の一行は

ヒルの都の人々に

行手を塞がれ一々に

病めるを癒やし助けつゝ

知らずくりに日を重ね

ヒルの都を後にして

アラシカ峠の山麓に

心欣々着きにける。

國依別

「サア姫様、あなたは始めての御旅行と云ひ、是から先は大變な急坂で御座いま

すから、ポツ／＼とお登り下さいませ。國依別もお附合にゆる／＼登りませう。男の足が先へ行くぞ、知らず／＼に早くなるものですから、こゝは最も足の弱い貴女が先へお登り下さい」

紅井姫

「足弱を御連れ下さいまして、さぞ御迷惑で御座いませう。あなたの御言葉に甘

に、歌々を捏ねる女と御さけすみで御座いませうが、私も斯うなつた以上は、決して妙な考へは起しませぬから、御安心下さいませ」

國依別

「此坂をズツと登りつめると、樟の大木の森があつて、そこには常世神王の古ほ

けた祠が建つてゐます。さうかそこ迄登つて休息をする事に致しませう」

エリナ

「姫様、随分険しい坂道で御座いますが、私は何時もこゝを通り慣れて居ります

から、左程苦痛には存じませぬ。坂でさぞ御困りでせう。後からお腰を押してあげますから、後へもたれる様にして御登りなされませ」

紅井

「ハイ、御親切に有難う御座います。今の處ではさうなり登れ相に御座いますから

到底叶はない様になりましたら、さうぞ御世話をお願い申します」

エリナは氣輕相に

エリナ「ハイ、何時でも押して上げます。キツと御心配なさいますなや」

と路々いたはり乍ら登つて行く。

話變つて、常世神王の祠の建つ樟の大木の根に、ヒツ／＼話に耽つてゐる二人の男があつた。

甲「オイ、モリス、馬鹿にしやがつたぢやないか。今となればお前も俺も、同病相憐れむ連中だから、別に内訌の起る筈もなし、暗中飛躍を試みる必要もなくなつたのだから、さうかして無念晴らしに、二人の奴を此方の者にしてやらうぢやないか。ア、阿呆らしい、國依別の奴が來やがつた計りで、俺達二人は免の字を頂戴し、今は殆ど野良犬の境遇だ。犬も歩けや棒に當るといふ事があるから、一つ雪隠の火事ぢ

やないが焼糞で、ウラル教の本山へでも、甘く這入り込んで使つて貰ふぢやないか！」

モリス「そつだ、貴様も戀の仇敵の國依別に肝腎の目的物をほつたぐられ、國依別の奴二人の女を兩手に花と云ふやうな調子で、大きな面して連れ出しやがつた時のムカついた事、是が何うして筆丸をさげてる人間として、看過する事が出来ようか。彼奴等三人は道々宣傳し乍らやつて來るんだから、何れ暇が要るに違ない。併し此處へやつて來やがつた位なら、此谷底へ國依別を矢庭につき落し、二人の女を自由自在に此方さんの要求に應じさせ、天下の色男は此通りだと云つて、あんな絶世のナイスと手を引いて、天下の大道を濶歩したら、さうなとせないと、腹の虫が得心せぬぢやないか。併し後の喧嘩を先へせいと云ふ事がある、甘く目的を達し

た上で、自分の女房に選定する段になつてから、選挙競争でも起ると大變だから、今の中に豫選でもやつて置かうぢやないか」

秋山別 「豫選なんか俺はヨセンわい。俺は紅井姫を女房にする特權（ブリヴィレギーオ）が先天的に具備してゐるのだ。貴様はエリナを女房にすれば良いよ。彼奴だつて満更捨てたもんぢやないからなア。チツミばかり日に焼けるよ云ふが、欠點位なものだ。中々スタイルには甲乙はないからかう」

モリス 「そんならお前がエリナのレコになつたら良いぢやないか。俺はどこ迄も初心を貫徹せなくてはならないのだ。紅井姫を女房にせうと思つて、され丈今迄骨を折つたか知れやしない。永らくの苦心を水泡に歸するのは、男子として忍ぶ可らざる耻辱だからなア」

秋山別

「俺だつて貴様以上に骨を折つたのだ。そんなお添物のエリナを鼻塞げか何んぞの様に差向けられてたまるものかい。貴様のスタイルにエリナの方が能く合つてゐるワ。烏の夫に孔雀の女房とは、チツミ無理だ。孔雀は孔雀同志夫婦になり、烏は烏同志夫婦になれば、それこそ家庭圓滿福徳成就疑ひなしだ。孔雀の俺は孔雀の女房を持つて、孔雀（不惜）身命的世界の爲活動をするなり、お前モリスだから、森に巢を作るのは烏にきまつてゐる。烏の女房を持つて、オイ／＼カカア嬖村屋、腰もめ肩打て、カア／＼と氣樂相に簡易生活をやるのも一寸乙だで。

樂しさは夕顔棚の下涼み……

と云つて、平民生活が最も理想的だ。提灯に釣鐘、釣合はぬやうな女房を持つたつて、苦しい計りだよ。第一教育の程度と云ひ、智識と云ひ、家柄と云ひ、雲泥の

懸隔ある女房を持たうとするのが第一謬つた了見だ。そうでなくても、男女同權だとか、女權擴張だとか、新しい女の騒ぐ世の中だから、釣合うた女を持つが貴様の將來（エストーンテーツォ）の爲だよ。俺は親密な友人として、貴様の將來の爲に、熱涙を呑んで忠告するのだ」

モリス 「ヘン、甘い事仰有りますワイ。其手は桑名の焼 始 だ。始 からでも屋氣樓が立上りますよ。お前さんこそ屋氣樓的空想を畫いて、あんな高尚な御姫さまを自分の女房にせうなんて、餘り懸隔が取れなさ過ぎるぢやないか。チツとお前のサツクと相談して見い」

秋山別 「コリヤ俺を何と心得てるる、俺は秋山別と云つて天孫人種だぞ。貴様は土人ぢやないか。チツと身分を考へて見い」

モリス 「人種無差別論の高潮した今日、時代遅れな事を言うない。そんなこつて、世界同胞主義が何時迄も成就すると思ふか。是だけ社會は人種無差別論の盛なのを貴様知らぬのか。ここ迄も昔の家閥を振りまはし、貴族面をしやがつて威張つたつて、昔なら通用するか知らぬが、文明開化の今日は、そんな古い頭は買手が無いぞ。文化生活と云ふ事を貴様は何と心得てるか」

秋山別 「ヘン、文化生活在聞いて呆れるワイ。今の奴の吐す文化生活在云ふのは、人の女房と手を取り、キツスをして妙なダンスをやつたり、仕舞の果にや役者の部室へ女房がへたり込んだり、お轉婆主義を發揮したり、爺は良い氣になり、うちの女王さんは餘程新しいと云つて喜んでる風俗壞亂生活を云ふのだらう。そんな事で如何して社會の秩序が保たれるか。貴様の思想は餘程怪しいもんだなア」

モリス 「そんなこたア、如何でもよい。女房の選舉だ。サア早くやらうぢやないか。貴重な一票を何卒入れて下さいと云つて、戸別訪問をする譯にも行かず、被選舉人が二人選舉人が二人だから、自由選舉にしたらどうだ」

秋山別 「そんなら俺は紅井姫を秋山別の妻に選舉する」

モリス 「俺は紅井姫をモリスの奥さんに選舉する、又俺の副守護神も同様、モリスの妻に紅井姫を選舉する、モウ一票は本守護神も同様だ。サア三票と一票だ。お氣の毒乍ら、當選の榮を得まして有難う御座います。あなたは運動が足りないから、どうく次點者になりましたねい。さうで秋山別さんだから、先方がアキが來ました。イヤ、ア、別れて下さい秋山別さん……なんどか云つて、秋波を送つて紅井姫だ。アハ、、、」

秋山別は腹を立て「ナアニ」と言ひ乍ら、モリスの横つ面を鬼の腹をふり上げて、首も飛べよと計り擲りつけた。モリスは

モリス 「ナアに喧嘩か、喧嘩なら俺も負はせぬぞ」

と鐵拳をふつて飛びかかり、遂には組んづ組まれつ、一生懸命格闘を始め、夕暮れの帳のさがる迄一杯血みぎろになつて、摺み合はうてゐる。

そこへ悠々として一男二女は登つて來た。

國依別 「ア、此處が印象の深い常世神王の祀られた楠の森の祠だ。大分に皆さん足も疲勞たでせう。一つ立寄つて休息せうぢやありませんか。都合に依れば、此森で一夜を明かし、新しい日輪様の光りを浴びて日暮シ山に立向ふことに致しませう」
と言ひ乍ら先に立つて、森蔭に進む。二人の女も、同じく森蔭に靜かに身を横へて、

疲勞た足をさすつてゐる。何だか暗がりでもシツカリとは分らぬが、二つの黒い影が「フー／＼」と息を喘ませ、上になり下になり轉けて居る。國依別は

國依「ハテ不思議な者が居るワイ。山犬の子でもざれよつて居るのではあるまいか」

と足音を忍ばせ乍ら、側近く寄つて暗にすかし見れば、さうやら二人の男が喧嘩をして居るらしい。國依別は……此奴一つおきかして、此喧嘩を止めさしてやらう……と心の中でうち諾つき、俄に作り聲、雷の様な大聲で

國依「此方は、常世神王の祠に守護致す大天狗であるぞよ！ 汝不屈き千萬にも此靈場

に來り、喧嘩を致すとは怪しからぬ奴……待て、今此大天狗が其方等二人共、股から引裂いて、楠木の枝にかけ、鳥にこつかしてやらうぞ！」

と喚なりつけた。二人は思はぬ天狗と聞いてハッとし離れ、大地に傷だらけの手を仕へ

血どろけの顔を俯むけ乍ら

秋山別「ハイ、私は秋山別と申す者で御座いますが、一方の男はモリスと申す悪戯者で御座います。女房の選挙に付きました、激烈なる運動を開始致しまして、遂には血を見る所まで参りました。今後は心得ますから、さうぞ股から引裂くの丈は御勘辯を願ひます」

モリス「大天狗様、さうか、秋山別を能く御戒め下さいまして紅井姫を思ひ切り、此モリスの女房に首尾よく渡します様にして下さいませ。これが一生の御願で御座います。それが叶はぬ様な事なれば假令引裂かれても構ひませぬ。此世に生てる甲斐が御座いませぬ。秋山別にはエリナを女房にしてやつて下さいませれば、三つ口に新粉、四つ口に羊羹、本當に都合の良い縁で御座います」

秋山 「さうぞ、私に紅井姫を御授け下さいませ。モリスはエリナで結構で御座います。さうして下さいませれば、天下は太平、無事長久疑なしで御座います」

國依別可笑しさを詠へて

國依 「其方の申す紅井姫、エリナの兩人はどこに居るか」

秋山 「ハイ、三五教の馬鹿宣傳使の女殺しの後家倒し、家破りの國依別と云ふ、それはく酔でも弱弱でもいかぬ悪い奴で御座いますが、其奴が二人の女を、アタ惚せし、ひつさらへて、ヒルの都の神籠を出立いたし、天下の色男はこんなものだい、兩手に花とは此事だ、二人の妻に手を引かれ黄金の橋を渡るには、俺の事だと言はん計りに、そこらうろつき乍ら、やがてこゝへ登つて来るでせう。さうぞ天狗さん國依別をグツとさらへて楠の上へ連れて上り、股から引裂いてやつて下されませ

これが一生の御願ひで御座います」

國依 「其紅井姫と云ふのは、其方に對して戀慕の心を持つて居る女であるか」

秋山 「ハイ、何分おボコ娘の事とて、ハッキリとは申しませぬが、大抵意思を付度する事は出来ます。キツと私に戀著して居るに相違ありません、一寸障つてもピンとはねたり、三番叟の様に、あゝイヤ〜と腕を振りますが、私も若い時に覺わが御座います。好きな人に袖でも引つばられると、耻かしくなつて、一旦は厭相に見せて撥まはし、後からあゝあんな事をせなんだら良かったに……と惜がつたことも御座いますれば、十分に脈は御座います」

モリス 「モシ天狗様、秋山別の言ふ事は、アリヤ違ひます。自分一人きめてゐるので御座いますから堪りませぬワ。鮑の貝の片思ひ、長持の蓋で此方があいても、向方が

根つからあきませんワイ。併しエリナなれば、どうにか斯うにか、天狗様が御紹介下さいましたなれば、女房に厭々なるでせう。どうぞ神聖な一票を、天狗様、此モリスにお與へ下さいませ」

國依 「そうして國依別を亡き者に致して呉れいと申すのか」

モリス 「ハイ、天則違反の男で御座います。雞か何かの様に三羽番ひで天下をうろつきますると、第一神様の教の名を汚します。教の爲にも、秩序維持の上にも、最も必要な事だと信じます」

國依 「そんなら、此天狗が許して遣はすによつて、早く此坂を下つて行け。一足でも先に掴まへた者の女房にしてやらう。大天狗が是から守護を致して、掴まへた者の女房に喜んでなるように守つてやらうぞ。今三人連れにて此の坂の三合目あたり迄登

つて来て居る程に、サア早く行け、早い者勝だ。マラソン競争を致して決勝點を取つた者に紅井姫をくれない事ないくれてやる。次點者にはエリナ姫を與へてやる、

一二三、ソラ行け……」

「ハイ有難う」

二人は眞暗がりの中を、石ころをころがした様にガラ／＼と音をさせて坂道を急駈天走りに降り行く。

國依 「アハ、何と面白い餘興を、神様から見せて頂いたものだ。……モシ御二人さん、どうでしたなア」

紅井姫 「ハイどうも恐ろしうて、胸騒ぎが致しましたワ。マア／＼天狗様が現はれて、甘く追ひ歸して下さいまして、こんな有難い事は御座いませぬ、國依別さま、あな

たはぎうおなりやしたかと思つて心配でしたワ。ぎうも御座りませぬでしたか」

エリナ「ホ、、、、姫様、アリヤ天狗ぢや御座いませぬよ。國依別さんがあんな聲をお使ひになつて、甘く二人をまかれたのです。私は餘り可笑しうて臍がお茶を沸かしかけました」

紅井姫不思議相な聲で

紅井「あ、そう、して又エリナさん、お腹に土瓶でも乗せてゐらしたの……」

國依「アハ、、、、流石はヤツバリ深窓に育つたお姫さんだワイ。紅井姫様、皆うそですよ、餘り可笑しいから、一つ大天狗の聲色を使つておどかし、まいてやつたのです、アハ、、、」

紅井「ぎうもあなたはお人が悪いですな。そんな嘘を言つても神様の御咎めは御座いま

せぬか」

國依「人は見かけによらぬ者、今迄正直な國依別と思つてゐられた貴女は、さぞお驚きになつたでせう。酢でも蕪蕪でも、挺でも棒でも喰へぬ、スレッツカラシの國依別ですからなア、アハ、、、」

紅井「あなた、蕪蕪やお酢、デユ芋、棒芋などは御嫌ひで御座いますか。私は蕪蕪にお芋は大の好物で御座います」

國依「アハ、、、、どこまでも可愛らしい御姫さんだなア」

エリナ「ホ、、、、お優しいお方、私も姫さんの様な産な心になつて見どう御座います」

國依「もしも二人の奴が後戻りをして來ると、又天狗が一骨折らねばならぬから、うる

さいですから、こゝを立去つて、もう少し往つた所で、適當な場所を考へて休息することに致しませう。エリナさん、姫様を氣をつけて、足許のこらない様に手を曳いて上げて下さる」

エリナ「サアお姫さん参りませう」

三人は雲の綻びより、所々に星の見わたる暗の空をスタク／＼と頂上見がけて登り行く。流石の高山、夜嵐ザワ／＼とあたりの木の枝をゆすり、何とかなしに、そこら中が物凄いな感じがしてゐる。

(大正二一、八、一八、舊六、二四、松村真澄録)

第八章 人

獸 (八七四)

國依別の宣傳使

紅裙隊を引率し

ヒルの城下を立出で、

數多の人の病をば

鎮魂言靈の神術に

救ひ助けつ漸くに

ヒルの城下を後にして

アラシカ峠に差かかり

足並弱き紅井の

姫命を勞はりつ

黄昏時に鬱蒼と

樟の大木の茂りたる

神王の森に立寄りて

夜露を凌ぎ一夜さを

明かさんものと三人が

樟の根元に腰をかけ

息を休むる折柄に
 怪しの聲が響き来る
 確にそれと分らねど
 但は獅子のいがみ合ひ
 調べて見んと星影に
 思ひも寄りぬ荒男
 命カラ／＼挑み合ふ
 吾れは御山の犬天狗
 不届き至極な聖場に
 何れの奴か知らね共

暗の中よりフウ／＼と
 暗の帳は深くして
 山犬きものざれ合ひか
 何か知らねど近よつて
 すかして見れば此は如何に
 揉みつもまれつ搦み合ひ
 國依別は諸づいて
 神王の森の守護神
 來りて喧嘩をなぜ致す
 首筋つかんで樟の空

股引裂いてかけてやる
 二人の男は驚いて
 兩手を土につき乍ら
 秋山別と申す者
 女房の選舉につきまして
 なつた揚句が此通り
 是れいモウシ天狗さま
 女房に興へて下さんせ
 これを興へて下さらば
 家庭の圓滿目のあたり

覺悟致せと呼ばはれば
 バツと二つに立別れ
 ヒルの館に仕へたる
 一人はモリスと申します
 競走次第に激烈と
 誠に濟まん事でした
 紅井姫を私の
 モリスの女房にやエリナ姫
 天下忽ち太平に
 何卒宜しう願ひます

語ればモリスは首をふり
 こんな男に紅井の
 どうぞ私に下さんせ
 宜しく御さばき頼みます
 頼み入るこそ可笑しけれ
 チツと忪へて國依別は
 アラシカ峠を登り來る
 勝つた者には呉れてやらう
 勇士に紅井姫をやる
 與へてやるから辛抱せよ

イエ／＼もうし天狗さん
 姫が如何して惚ませう
 彼にはエリナで十分だ
 一心不亂に手を合せ
 吹き出す計りの可笑しさを
 又も天狗の作り聲
 二人の女を競走して
 決勝點に先着の
 敗けた奴にはエリナ姫
 國依別の神司

俺が守護して望みの通り
 一二三つ早行けと
 先を争ひバラ／＼と
 後に國さん高笑ひ
 エリナ紅井お姫さん
 餘興を見せて貰つたと
 妾は胸がドキ／＼と
 あなた如何して御座つたか
 先づく無事で目出たいと
 國依別は兩人を

谷の底へと放つてやらう
 其掛聲に兩人は
 こけつ轉びつ降り行く
 アハ、、、アハ、、、
 今宵は實に面白い
 笑へば姫は驚いて
 怖い思ひをしましたよ
 本當に怖い天狗さん
 未通娘の愛らしさ
 伴ひ此處を立出で、

アラシカ山の山頂に

漸く登り 傍の

森林さして忍び入り

ここに一夜を明かしつゝ

旭の光りを浴び乍ら

アラシカ峠の急坂を

西南指して降り行く

あゝ 惟神々々

御靈幸はひましませよ。

國依別は漸くにして日の暮るゝ頃、二人の足弱き女を勞はり乍ら、日暮シ河の丸木橋の畔迄辿り着いた。大地震の爲に橋はスツカリ墜落して了ひ、日暮シ河は滔々とし濁水が流れて居る。止むを得ず、橋の袂の萱草の中に三人は一夜を明かす事となつた。

夜中頃と覺しき頃、二人の女はふと目をさまし、ガサ／＼とそよぐ萱の葉音に戦きた。

乍ら、目を据はて窺ひ見れば、二人の荒男あたりをウロ／＼迂路つき乍ら

男「オイ、モリス、あの天狗、どう／＼俺等を馬鹿にしやがつたぢやないか。あの時に天狗に魅まれさへしなかつたら、今頃には甘く追ひついて、此方の者にして居る所だつたのに、なア本當に馬鹿を見たぢやないか」

モリス「それでもあの時に天狗が現はれなかつたならば、俺がお前か、ぢちらか命がなくなつてるんだ。マアおかげで二人共命丈は助かり、安全に此處迄搜索に來られたのだ。こゝろ暗くなつては最早進む事も出来ない。大方國依別外二人の女は、餘り遠くは行つて居ろまい、日暮シ山の岩窟へは、何程コンバスに燃をかけても、足弱の二人の女が従いてをるのだから、到底到着して居る氣遣はないワ。やがて一時計りしたら月が出るから、一足でも先へ進まうぢやないか。キツと此川堤を行きよつ

たに違ひないぞ」

秋山

「さうだらうかなア。併し足を痛めて、此邊にすつこんで居やせまいかな。何だか人臭いやうな氣がするぢやないか」

モリス

「そりやお前の神經作用だ。決してこんな所に居るもんか」

秋山

「オイ國依別と云ふ奴、さこ迄も癪に障る代物だから、何とこらしめてやりたいと思つんだが、直に鎮魂とか、言靈とか云やがつて、非常な力を出しよるから、一通りでは駄目だぞ。今度は甘く尾をふつて降参の体を装ひ、誠にすまん事を致しました。今後はスツバリ改心致しまして姫様始め皆様にお詫に出来ましたぞ、下から低う出て油断をさせ、小股を掬うて、ドサンと引くりかへし、其上から土足でギエツノとふみチャクリ、腸を破つて了うんだ。其後は此方の者だ。何と妙案たらう」

モリス

「妙案々々キツとウラル教から、軍師として招聘しに来るだらうよ。併し乍ら此處で一つ選挙のしなをしをやらないと、又しても紛擾の種を蒔く様な事では互の利益だからなア」

秋山

「モウ選挙は止めにせうかい。成功せない中から、定めておいた所が仕方がないぢやないか。それより願望成就の上、チャンケン坊なつと、籤引（ろーと）なつと、或は御神籤なつと、そんな方法でもあるから、其上の事にせうかい。今きまつて了ふと、當選者の方は活動する樂みがあるが、負た方は張合が無うて命がけの活動は出尔んからなア」

紅井姫は二人の話を聞き慄ひ上り、エリナの體に喰ひついて息をこらして居る。

エリナは俄に作り聲をし乍ら、萱の繁みに身を隠し

「ホッホ、ハ、」

と力のない厭らしい聲で笑ひ出した。紅井姫はビツクリして

紅井「モシ、姉ねさん、勘忍して下さいな」

と泣き聲になる。

エリナ「姫さん、御心配なさいますなや。一寸化者の真似して、彼奴等二人を追ひちらしてやるんですから」

紅井「それでも、あなた、そんな聲をお出しになると、妾怖うて堪りませんゾ。貴女が化者の様に思はれてなりませんもの」

エリナ「心配しなさんな。怖いことありませんよ。向方を怖がらしてやりさへすれば良いのです。これからチツと厭らしい事を云ひますから其積りで居つて下さい。キツ

と怖い事ありませぬからなア」

紅井「それでもこんな怖い野原に寝てみますのに、まだそんな聲を聞かされては、髪の毛が縮むやうな気がして、怖くて堪りませぬワ」

エリナ「それ程怖ければ止めておきませうかなア」

紅井「どうぞ御頼みですから、厭らしい聲は出さぬやうにして下さい」
と慄うてゐる。秋山別小聲になつて

秋山「オイ、モリス、何だか妙な聲がしたぢやないか。気分が悪い晩だなア。こんな所に鶯の鳴く筈もなし、ホ、ホ、ほんまに俺は気分がカブラ／＼して、足が大根々々したよ。どうやら肝つ玉が洋行しさうだ、本當に氣味の悪い夜さだなア」

モリス「ナアニ心配すな、アリヤ鳩の爺イだよ。野鳩がこの邊に寝てゐるのだが、年が

よつて齒が抜けたと見え、あんな聲を出しよるんだ」

國依別は最前から目をさまし、双方の様子を聞いてゐた。

國依 「ハテ面白い、此奴一つおどかして、歸なしてやらねば、未通育ちの姫さんが、又怖がつて仕方がない」

と小聲に囁き乍ら、芒の株を力一杯、ガサ／＼と揺つて見せた。秋山別は肝をつぶしドスンと腰を下し

秋山 「ギャハ、抜けた／＼ア、一寸來て呉れやい」

モリス 「何が抜けたのだ」

秋山 「勝だ／＼、さうしても歩けないワ。何だか怪体な者が居やがるぢやないか。昨夕の天狗なら一寸も怖い事ないが、あんな厭らしい聲を出しやがると厭らしくて仕方がないワ」

「がないワ」

モリスは何もなく心淋しくなつて來た。併し無理に空元氣をつけて、震ひ聲を出し

モリス 「オイ、ア、秋山別、ナ、何がそれ程怖いのだ。天下無双のヒーロー豪傑、ヂヤンヂヤヘールのモリスさんが、ゴ、御座るぞよ。バ、化者位、假令千匹や万匹出て來た所で、チツとも怖くない事はないワイ、チ、チツとしつかりせんかい」

國依 「ギャツハ、、、ギユフ、、、ギョツホ、、、」

秋山 「それ又出よつたぞ、益々怪体な聲を出すぢやないか」

モリス 「ギャファアハ、なんて人をギャフンとさす化者の計略だらう……ヤイ化者、ギョホ、、、て何ぢや。其位な事で此方はギョツとせんぞ。ギユフ、、、なんてそら何ぢや。ギューと云はさうと思つたつて、そんな事がこたへる様な俺と思ふか。バ

、馬鹿らしい。今日は日が悪いから又明日出い」

紅井姫小聲で

紅井

「なア姉ねさん、どうしまししょう。あんな事姉さんが仰有るものだから、本まの…

…本まもんが出たぢやありませんか、妾怖いわ」

エリナ小聲で

エリナ

「姫さん、心配なさいますな。ありや國依別さんがあんな事を言つてるんですよ

化者でも何でもありませんね」

紅井

「姉さん、どうぞ御頼みですから、國依別さんに、あんな事言はないやうに止めて

下さいなア」

エリナ

「マア良いぢやありませんか。妾が斯うしつかりと抱けて上げますから、そう震

はずに、氣をしつかりなさいませ」

國依別聲をガサ／＼と揺り乍ら、怪しい作り聲をして

國依

「ホー／＼ホホホー、アホ／＼アホ／＼、ア、ホ、ホ、キ、ホ、ホ、ヤホ、

マホ、マホ、ケホ、ケホ、ホホホケイキヨ、モーホ、リーホ、スーホ、ホホホーホ

ーケキヨ、ケツキヨ／＼、ニヤーン、モウ／＼、ワン／＼ウー」

秋山

「オイ、モリス、いよく怪しからぬ事になつて来たぞ。鳥だと思へば猫の聲を出し

やがる。猫かと思へば牛犬狼虎オイどうぞ頼みだ。俺を負うて逃げてくれぬか。

腰が立たぬのだから……」

モリス

「オ、俺だつて、腰が怪しくなつて来た。足だつて細かう動き出すなり、お前

所か、俺の身が持てぬのだ」

秋山「なんほ利己主義（エゴイースモ）が發達した世の中だとして、チツとは俺にも同情して呉れたら如何だ」

モリス「俺だつてシンバシーの涙に暮れては居るが、斯うなつては如何ともする事が出来ないぢやないか。心臓寺の和尚奴が無茶苦茶に早鐘をつきやがつて、何所ぢやないワイ。俺やモウ人の事所ぢやない、四這になつて逃げ出すワイ」

モリナ／＼する足を、犬の様に四這となり、ガサ／＼と元來し道へ這ひ出した。秋山別も餘りの怖さに、腰の痛いのを忘れ、無理無体にモリスの後に従いて、無暗矢鱈に這ひ出し逃げ出した。

國依「アハ、、、オイ秋山別、モリスの兩人さん、アラシカ峠の大天狗又の御名は國依別命、紅井姫様のお伴をしてエリナさんと三人、此處に休息をして居るから、チ

ツと來たら如何だ。よい取持をしてやらうかなア」

兩人は益々驚き

「ヤアバ、化者奴、國依別の聲色を使ひやがつた。コラ大變」

と無性矢鱈にガサ／＼／＼と四這になつて、力限りに逃げ出して行く。

（大正一一、八、一八、舊六、二四、松村眞澄録）

第九章 誤 神 託 (八七五)

秋山別、モリスの兩人は、日暮シ河の南岸の萱野原に休息する折、忽ち暗がりより怪しき聲の聞え來りしに怖氣付き、四這となつて其處を逃げ出し、二二三丁計り引返し、やうくこゝに胸を撫でおろし、それより再びアラシカ山を駈登り、神王の森に到着し、神勅を受けて、紅井姫の行方を伺ふ事とした。秋山別は、神主となり、モリスは審神者となつて、翌日の眞夜中頃に神占を奉伺する事とした。

古ぼけた祠の床の上に三四尺間隔を置いて、神主、審神者は向ひ合うた。モリスは双手を組んで不整調な音調もて天の數歌を歌ひ上げた。

「人、二人、見つけて、四るでも晝でも、五ちやつきまはし、六りやりに押さへつ

けて、七んでもかんでも入り倒し、九ころに思ふ丈十く心する迄、百千萬遍でも、思惑を立てさせ玉はねば、常世神王の森は離れませぬぞや」

秋山別「コラ、モリス、何を吐すんだ。そんな事で靈がかゝるかい。馬鹿らしくつて、きばつて居れぬだないか。モ一遍やり直せ」

モリス「專賣特許の新規發明だ。特許意匠登録の手續き中だから、マア黙つて聞いて居らう。何でも新しい事が流行する時節だから、開闢の初から襲用して來た一二三四……も餘り苔が生ねて面白くないからなア。神様も今迄の數歌はモウ聞きたんのようにしてゐらつしやるから、チツと珍らしい事を申し上げて、此方に向かすと云ふ俺の一厘の秘密だ」

秋山「お前神主になれ、俺が審神者をしてやらう。お前の審神者では根つから氣乗りが

せぬワイ。審神者さへよければ、どんな立派な神でも憑るんだからなア。併し何ほモリスだつて、モリ住居の烏の神懸りは御免だから、臍下丹田に心を納めて、無我の境遇に入らねば駄目だよ。先づ第一に一切の夢想を除去する事。身体衣服を清潔にする事。併し旅行中だから衣服を清潔にする事又は免除しておかう。山の上で水行する所がないから、身体の清潔も己むを得ずとして、是も免除する。次に感覺を蕩盡し、意念を斷滅する事、大死一番の境に入る事。姿勢を正しうして瞑目靜座する事。次に審神者が何を尋ねるか……何ぞと云ふ様な疑惑を持たぬ事。取越苦勞を致さぬ事。過越苦勞を致さぬ事。刹那心を樂むこと。それから最も大切な心得は、紅井姫に對して少しも執着のなき事。これ丈の心得がなければ、正しい神が憑つて来て、正しい判斷を與へてくれぬから、其積りで心身を澄清にし、威觸の爲に亂れ

ざる事を慎むべし……マアこんなもんだ」

モリス 「大變に六つかしい事を言うんだね。モツと平たく云うて呉れないか」

秋山 「俺だつて平たく言ふこた出来ぬワイ。現在どんな意味だと言ふ事は、俺も分らぬのだからな。楓別命さんが何時も仰有る事を無意識に腹へ詰め込んだ丈だ。併し分らぬのが有難いのだよ。お經だつてそうぢやないか。唱へてる坊主でさへもテンデ何の事か分らず、聞いている連中も分らぬとこに有難味があるんだ。

分つて見ての後の心に比ぶれば、分らぬ昔ぞ有難かりけり

と云ふようなもんだな。サア早く瞑目靜座せんかい」

モリス 「サア、どんなエライ神さんが、お憑りになるか知れぬぞ。ビツクリするなよ」

秋山 「何だ其スタイルは、無茶苦茶に臍を張りやがつて、馬鹿に威張つゑるぢやないか

丸で鉛の天神さん見たいに、見つともないぞ。モウちつと肩を下て、品のよい地藏肩にせんかい」

モリスは無性矢鱈に手を振り、首を揺り、口をバクくさせ乍ら、齒糞だらけの不整律な田螺の様な齒を剝き出し

モリス「ウー~~~~」

ドスン~~~~と床をふるはせ乍ら飛びあがり出した。

秋山「ヤア、随分烈しい神懸りだ」

ボン~~~~と二拍手し乍ら恭しく頭を下け

秋山「何れの神様で御座いますか？ 何卒御名を告げさせ玉へ。及ばず乍ら秋山別、審神者を仕りまする」

モリス「アハー~~~~、阿呆らしいワイ。アキもせぬ巖路にあくせくと致して、そこらあたりを歩き廻し、憐れな面を致して、姫に會いたい~~~~と憧憬歩く、安本丹、悪人の癖に女に對しては、随分涙脆い奴ぢやのう。此方は神王の森に、年古く守護致す悪魔大王と申す大天狗であるぞよ」

秋山「ア、餘りむや御座いませぬか。アタ悪性な人の欠點計り並べ立て、あられもない事を仰有ります。餘りのこつて、秋山別も呆れて物が言はれませぬワイ、アフンとして開いた口が早速には塞がりませぬ。悪魔大王様、モウちつと色よい御託宜をして下さつたら如何です」

モリス「イヒ、色よい返事をせいと申すが、此大天狗は男であるぞよ。其方の色よい返事がして欲しいのは、紅井姫の口からであらう。いろ~~~~と工夫を致し、手を

廻し、足を働かせ、幾年掛つても意思互に疎通するまで行くのだ、そうすれば色好
い返事が来るかも知れぬぞよ。いらつでないぞよ。勢に任して早く盛物に手をか
けようぞ致すぞ、サツバリ可かんぞよ。何事もイ、因縁づくちや。カ一杯意茶つく
様になるのは、一二年先かも知れぬぞよ。一日も早く添いたくば、蟻蟻の黒焼を拵
へてふりかけたが、一番著しい偉効があるぞよ。要らぬことに何時までも心配を
致すでないぞよ。いけ好かない面をして、餘り威張るもんだから、厭がられて了う
のだ。俺の意見に異議があれば、どこ迄でも尋ねたがよいぞよ。委細の様子を一伍
一什、説き諭してやるぞよ」

秋山「イ、意茶つかさずに、モツモ一さくにらつて、言つて下さいませ。心が、いら
くして、意思が固まりませぬ。石よりも固い私の決心、いつがなく、何時に

なつても動く様なチヨロ臭い戀では御座いませぬ。意地づくでも目的を立てねば置
かぬので御座いますが、一体此戀は何時になつたら成就するもんで御座いませうか
な。一年も二年も待てど仰有つても、到底さう永くは待てませぬワ」

モリス「ウフ、うるさがられて、脇鐵を亂射され乍ら、まだ目が醒めぬか。うろた
へ者奴、紅井姫もお前の迂濶な知慧にはウンザリしてゐるぞよ。何程其方が秋波を
送つても、濃んだ鼻が潰れたとも、言つて来る氣遣ひはあるまい。うぶの心になつ
て神の誠の教を悟り、普く人を愛し、牛の様に俯むいて働かさへすれば、美しい女
がうるさい程、ウザくも其方の側へ集まつて来るぞよ。先づ第一運の循つて来る
迄、誠を盡して待つて居るが良からう」

秋山「ウ、うつかり聞いて居らうもんなら、此天狗何を吐すか分つたもんぢやない。

「モウ御引取り下さい……」

ポン／＼と手を拍つ。

モリス 「エッへ、、、まだく言はんならぬ事がある。縁と月日は待つがよいと云ふ事があらうがなア。併し乍ら其方と紅井姫との縁は餘り遠方過ぎて、届き兼ねるから其方から遠慮を致したが得だらう。繪にもかけない様な美人を、鳥羽繪の如うな面をした其方が、女房に選ぶとは、チツと提灯に釣鐘だ。閻魔の帳面を拜借して調べて見い、紅井姫はモリスの妻なりと、ハッキリと附け止めてあるぞよ」

秋山 「エ、此奴ア偽神懸りをやつてやがるんだな。感覺を蕩盡し、意念を斷滅した神懸りがモリスの都合の好い事を吐す云ふのが怪しい……オイ、モリス、もう駄目だサッバリ化けが現はれたぞ。秋山別の審神者を瞞さうと思つても、此方の天眼通を

欺く事は出来まい。どうく狐の尻尾を出しよつたちやないか」

モリス 「オッホ、、、尾を出したと申すが、其方に尾が見ゆるか、見ゆるなら一つ掴へて見よ。横道者奴、大天狗を掴へて狐などとは能くも大きな口で申したなア」

秋山 「オ、、おきやがれ。脅し文句計り並べて、往生さそうと思つても、そんな事に尾を巻いて、へ／＼言ふ様な俺ぢやないワイ」

モリス 「カツカツ、、、鳥の婿に孔雀の嫁とは、チツと釣合はぬぢやないか。能く考へて見い」

秋山 「カ、構うない、俺の嫌の事まで干渉する権利がどこにあるか」

モリス 「キツ、、、貴様、それでも嫌の事に就いて神勅を伺ふと申し、モリスを神主として尋ねて居るのではないか。チツときまり悪うなり、氣味が良くない事を吐す氣

にくはん、氣障な大天狗だと思つて居るであらう。

ク、黒い面をして、雪の如うな姫に戀だの鮎だのど、何を洒落るのだ」

秋山 「さうしても此奴ア怪しいぞ。オーイ、モリス、い、加減に止めたら如何だい。そんな偽神懸りをやつたつて、駄目だぞ」

モリス 「ケツ／＼／＼怪つ体の悪い、さう／＼尻尾を掴みやがつたな、ヤツバリ俺はモリス大明神だ。鳥一匹の靈も蜥蜴の靈も、實の所は懸つてはゐないのだよ。何と云つても俺の靈が皆紅井姫にかゝつてるもんだから、サツパリ脱殻だ。受ける靈がないもんだから、大天狗も懸る事が出来ぬぞよ。アツハ、、、」

秋山別 「コッコ、斯んな事を言つて居つても、何時までも果てぬから、是から口占を行つて、吾々の進退をきめる事にせうかい」

モリス 「サ、早速口占で決定て了はう。シ、しつかりと腹帯を締めて掛らぬぞ、又國依別にス、すつば抜を喰はされて了ふぞ。國依別の奴甘い事しやがつて、セ、雪隠で饅頭食たよな面してゐるやがるのが癪に障つて堪らぬぢやないか？」

秋山 「ソ、そらそうぢや。互にしつかりせんと、タ、忽ち……忽ちぢや。チ、血道を分けて、ツ、付き纏うた、テ、天女の様な御姫さんを、ト、取られて了うて、ナ、情ないぢやないか。ニ、二人共能い面曝て、月夜に釜を、ヌ、抜かれて了ひ、ネ、根つから葉つから、糞面白くもない。斯んな目に會うてノ、呑氣な顔しても居られぬワイ。ハ、早う何と良い智慧をめぐらし、ヒ、秘密の奥を探り、妙を盡し、一時も早くフ、夫婦になつて、へ、平和な家庭を作り、姫をホ、ホームの女王と仰ぎ奉り、マ、まめやかに、ミ、身を粉

にして、一言も肯かず、女王さんのム、無理を無理と思はずに喜んで参り、メ、滅多に怒らぬ様にせなくては、折角モ、貰うた奥さんもサツパリ駄目になつて了うかも知れないぞ」

モリス「ヤ、喧しワイ、イ、いろ／＼とらつちもないことを、ユ、言やがつて、エ、縁起の悪い、ヨ、ヨタリスクを、ラ、亂發し、リ、理窟にも合はん事を、ル、縷々數万言を並べ立て、レ、廉耻心を一寸辨へんか、ロ、碌でなし奴、ワ、笑はしやがる、キ、何時迄も女の尻を、ウ、迂路々々、うろつき廻り、エ、エツバツバを喰はされても、オ、お前はまだ目が醒めぬのか、ガ、餓鬼ぢやなア、我利々々亡者の、ギ、義理知らず奴、グ、愚にもつかぬ事を何時迄もグツ／＼と、ゲ、げん糞の悪い、ゴ、切託を並べ、ザ、ザマが悪い

ぞ。ジ、ジつと胸に手を當て、考へて見い、貴様の様なズ、づ法螺に誰がエリナだつて、ゼ、膳を据ゑるもんか、ゾ、ぞ、髪が立つと云うて逃げ出すぞよ」

秋山「ダ、黙れ、入釜しいワイ。ヂ、ぢつとして聞いて居れば、ツ、圖々しくも止め度もなく喋り立てやがつて、モウ俺もウンザリした。勝手に喋つておけ、デ、でん／＼虫でさへも家を持つてるのに、宿無し坊奴が、ド、どこまでも毒つきやがつて、バ、馬鹿にするも程があるぞよ。此上何なつと吐いて見よ、ビ、貧乏搖ぎもならんよに靈をかけて封じてやろか。ブ、無細工な鱗面をしやがつて、べ、べらく／＼色男氣取で、何を吐くんたい、ポ、ほけの粕奴」

モリス「バ、ビ、ブ、ベ、ボ、と屁をこいた様な屁理窟をやめて、是から二人の女を力一杯アイウエオだ。そうすれば向方だつて結局にはお前さん私に向つてナニヌネノ

なさる言はれまい。しまいの果にやサシスセソだ。彼奴の事思つと、何時も何だ知らぬが、タチツテトだ。暗かりに〇〇の〇〇へハヒフヘホして肱鐵をかまされ、耻をカキケコやるよりも、あのナイスをワキウエヲにして了うんだなア。サア神懸りや口トで伺つて居つても根つからマミムメモな事を知らして呉れないから、實地が一番早道だ。キノ日暮ン山の岩窟の中で陥穽に放り込まれ、誰か強い人が出て来て私を早く助けて紅井姫かなア……なんど青息吐息をついてるかも知れないよ。サア天狗の託宣ぢやないが、マラソン競争で決勝點を得た者が紅井姫のハズバンドだ。スキートハートし切つたナイスを無下に見殺しにするのも、男の顔が立たない。都合よく陥まつて居れば良いがなア」

秋山別「そうすれば此秋山別が、紅井姫さんをグツと抱上げ……これはく……あなた

かと思へば、ヒルの館の楓別命様の御妹の紅井の君で御座いましたか、誠に危いところで御座いました。マアく結構で御座います。是と云ふのも神様の御かけ、第一秋山別の舍身の活動の結果で御座いますワイ……と圓滑に高飛車に言葉車を運轉さす、そうすると姫様が玉の涙を泛べ給ひ……誰かと思へばお前は秋山別であつたか、これ程世の中に澤山の人があつても、妾に命がけの同情をして呉れる者はお前より無い、あ、濟まなかつた。そんな親切な男と知らずして、今まで飯の上の蠅を追うやうにすげなうしたのは、濟まなかつた。秋山別、相變らず可愛がつて頂戴ね……なんて、反對に紅井姫さんの方からラバーすると云ふ段取りだ。イヒ、ウフ、エヘ、オホ、お、面白い、イヤお芽出たい。割なき仲となつて御互に面白く可笑しく此世を送るんだなア。泣いて暮すも一生なら、笑

つて暮すも一生だ。アハ、、、」

モリス「勝手に何なつて言つて、糖喜びをして居るが好いワ。サア一時も早く決勝點に達した者がハズバンドだ。誰が何と云つても、大天狗の御許しだから、……オイ、グツ／＼してると、丸木橋のあたりで日でも暮れようもんなら。例のホ、、、だサア行かう」

と尻ひつからけ、神王の森を後に、二人は一生懸命に、又もや日暮シ山の岩窟さして進み行く。

(大正一一、八、一九、舊六、二七、松村眞澄録)

第一〇章 噂の影 (八七六)

日暮シ山の山麓に

教の館を開きつ、

朝な夕なにサボリ居る

日暮シ山のウラル教

アナン、ユーズを始めとし

ブール教主の目を忍び

葡萄酒の倉を押開けて

盗み出したる豊醇の

甘しき酒に舌綻れ

二人は膝を付き合せ

ヒツ／＼話に耽りゐる。

ユーズ「オイ、アナン、アラシカ山の山麓エリナの宅へ往つた時は随分面白かつただらうなア。あの時にあゝ云ふ地震さへ無ければ、貴様は甘くやつて居たのだらうに、

惜しい事をしたものではないか」

アナン 「そりや随分面白かつたよ。併し乍ら流石はエスの娘丈あつて、随分賣り出しやがつた時や、流石の俺も一寸は驚かざるを得なかつた。併し此頃の大將の御機嫌と云つたら、サツパリなつてゐないぢやないか。何と申して機嫌を取る妙案はなからうかねい。何を云つても此間の様にヒルの都攻めに失敗し、大將が焦れて居つた。紅井姫を生捕つて歸つて御目につけられないもんだから、御機嫌が悪いのだよ」

ユーズ 「馬鹿言へ、教主に限つて、そんな陽気な心があるものか。あれ丈一心に神様の事計りして御座るのだから……」

アナン 「そこが思案の外と云ふのだ。お前も餘程お目出たいねい。實の所ヒルの都攻めに、吾々を御遣はしなかつたのは、肝腎要の目的は紅井姫を生捕にして歸れ……」

……と云ふのが眼目だからなア」

ユーズ 「教主が又如何してヒルの館の紅井姫を知つてゐるのだ、それが分らぬぢやないか。紅井姫は所謂箱入娘で、城外へ一步も踏み出した事がないと云ふのぢやないか」

アナン 「そこが其處だ……遠い様でも近いは男と女と云つてなア。いつの間にかチャンと鋭敏な教主の目には、遠うの昔に止まつてゐるのだ。お前達は幹部になつてから、まだ時日が経たないから、本當の事は知らないが五六年前の事だつた。ヒルの都の下手から船に乗つて、帆を順風に孕ませ、プールの教主が此方へ御歸りの途中、上からスツと流して来た遊山船の中に、十四五の何とも知れぬ、天女の様な娘が乗つてゐるぢやないか。其時にプールの教主は其女に見とれて船端を踏み外し

川中に陥り、大變危ない事があつたのだ。俺は其時お側に居つたから、能く知つてゐるのだ。教主は俺達に川の中から救ひ上げられ、御苦勞だとも何とも言はずに……あの綺麗な娘は、一体何處の者だ……と意味ありげに御尋ねになつた其時に、俺は教主に向つて……あの女はヒルの都の神館紅葉彦命の娘で御座います……と云つた所、直にグンニヤリとうな垂れ、それは實に失望落膽の体だつたよ。其後云ふものは、如何したものか、何程よい縁があつても、教主は皆撥ねつけて了ひ、元氣盛りの身を以て、今に獨身生活を續けて御座るのも、そこには一つの思惑があつての事だよ。何とかしてあの女を引張込み、教主の奥さんになりたいもんだ。さうすれば何時もニコ／＼で御機嫌が能いだけれど、此頃の様な六つかしい顔を見せられると、俺達も本當に堪らないワ」

ユーズ 「そりや今が初耳だ。そんな事で御機嫌が直るのなれば、何と一つ献身的活動を續けて、成功させたいもんだなア。そんな秘密を知つて居つて、何故今迄智謀絶倫のユーズに知らさなかつたのだ。どないでもユーズの利くユーズさんだから、遠うの昔に、俺が知つて居れば、成功して居るんだがなア」

アナン 「お前は酒に酔うた時許り、無茶苦茶に強いが、酔が醒めると、サツパリ大水が引いた跡の様に、臆病になり、シヨピンとして縮こまつて居るのだから、當にならなによ」

ユーズ 「ナアニ、そんな事に掛たら、得手に帆の此方だ。キツと成功させて見せる」

アナン 「そんならお前、是からヒルの都へ乗込んで、何と計略（アルティフィーコ）を以て引張出して來たら如何だ」

ユーズ 「一切萬事我方寸にありだ。今日は前祝として、十分にブル酒を頂戴し、いよ
く明日から活動の幕を切つておろすから、甘く往つたら拍手喝采を願ひまーすだ
アッハ、ハ、面白い〜」

アナン 「併しお前、暫くヒルの都行は見合して、ここに居つて呉れねばならない事があ
る」

ユーズ 「そりや又如何云ふ事だ」

アナン 「お前も知つてゐる通り、國依別の宣傳使が使はしたキヂ、マチの兩人、あゝし
て何時迄も 陥穽へほり込み、毎日腐つた梨や密柑の二つや三つ放り込んで、生命
をつながせ、虐待して歸してやらぬものだから、國依別も今頃は日暮シ山へ遣はし
た兩人は今に歸つて來ない、さうして居るのだらう。まさかあれ丈の熱心だから、

よもやウラル教に逆轉してゐるのでもあるまい、大方陥穽へでも落されて舌んで
居るに違ない、一つ實地探險と出掛ようか……なごご云つて、のし〜とやつて來
ようものなら、それこそ此間の地震ぢやないが、此靈場は地異天變の大慘事が突發
するのだ。それが第一氣に掛つてならないのだ。何ぞか國依別がやつて來よつたら
今迄とは態度を一變し、最善の方法を講じて見ねばなるまいぞ」

ユーズ 「そうだなア、今度は此方から極下に出て、御客さん 扱にし、國依別を心の底
から得心させ、さうして都合好くば、ウラル教の副教主に推薦してやつたら、何程
頑固な彼奴だつて、今日の普通宣傳使の境遇から比べて見れば、其地位名望に於て
雲泥の相違だから、喜んで應ずるに違ひない。ウラル教も此頃の様に秋風が吹いて
日に〜寂寥の空氣に包まれて居る際だから、敵を以て敵を制する筆法で、あゝ云

ふ立派な男を、此方の味方に取り込んだならば、ウラル教も再び勢力を盛返し、昔の様に立派な敵團になるであらうと思ふが、お前は如何考へるか」

アナン 「それもさうだ。併し乍ら、そう甘く着々と此事業が進行するだらうかなア」

ユーズ 「決して御心配御無用だ」

と話してゐる時しも、門番のハル、ナイルの兩人慌だしく駆け來り

ハル 「申し上げます。只今國依別が岩戸の口迄参りまして、それはく美しい紅井姫と

かエリナと云つて、二人の素的な女を伴ひ、早く幹部の誰かに會はして呉れよと云つて、何と云つても歸りませぬ。如何取計つたら宜しう御座いませうかなア」

アナンはハツと驚き乍ら、稍聲を震はせて

アナン 「ナ、何と申す。ク、國依別が來たと申すか」

ユーズ 「紅井姫、エリナの兩人がお見ねになつたと云ふのか。そりや人達ではあるまいな」

ハル 「エ、決してく間違は御座いませぬ。三倉山の谷合で見た宣傳使です。そして一人はエリナに間違御座いませぬ。紅井姫と云ふ方は是迄に會つた事がないから、眞偽は分りませぬが、随分綺麗な女です。此岩館でも一目睨んだら、ガチャ／＼と碎いて了ひさうな目付をして居りますよ。……………ナア、ナイル、随分別嬪だつたなア」

ナイル 「御兩人様、決して間違はなからうと思ひます。何と返事をせなくてはなりませぬが、如何致しませう」

アナン 「一寸待て、考へがある」

と俯むき、ユーズと共に腕を組み、考へ込んでゐる。其間にハル、ナイルの兩人は逸早く此場を立去り、表口に現はれ來り、國依別に向ひ、兩人口を揃へて

「オイ、一寸待て、此方にも考へがある……アナン、ユーズの御大將が仰せになりました」

國依「なに、一寸待て此方に考へがある……とは怪しからぬ。よし其方がそうなら此方にも考へがある……サア姫様、エリナさん、私に従いてお出でなさいませ」

と窟内に踏み込まうとする。ハル、ナイルの兩人は大手を振り
兩人「マア〜待つて下さいませ。タ、大變で御座います。一寸待て、此方にも考へがある……二人の大將が仰有つたのだから、そう勝手に押入つて貰ひますと、あとで私が如何な目に會はされるかも分りませぬ。一寸奥から返事がある迄、暫く其

處に休んでゐて下さい」

國依「あ、仕方がない、暫く茲に休息がてら、待つて遣はす、早く返答（レスポンド）を致す様に、奥へ一度伺つて來い」

ハル小聲で

ハル「始めて來やがつて、偉相に、俺達を奴扱ひにしやがる。わ、怪体の悪い……」

と吐き乍ら、再びアナン、ユーズの居間へ走り入つた。

二人は互に腕を組み、差俯むいて途方に暮れ乍ら、一寸顔をあげて見ると、最前使に來た兩人は何時の間にか其處に居ない。

アナン「あ、二人の奴、どこへ行きよつたのかなア。まだ返事を聞かない中から飛出し

たのではあるまいか。災は下からと云つて、せうもない事言やがるぞ、後が面倒になつて纏まりがつかなくなる。折角の神謀鬼策が駄目になつた例もある慣ひだね、困つた奴だ」

と兩人は顔見合して呟いて居る。其處へ慌だしくハル、ナイルの兩人走り來り

「申上げます、大變に剛情な奴で、無理に押入らうと致しますので、あなたの御言葉の通り……オイ一寸待て、此方にも一つ考へがある……とがましてやりましたら、國依別の奴……ナニ猪口才な、そちらに考へがあれば此方にも考へがある……とエラさうな事を言つてました。御用心なさらぬと、あんな強い奴が現はれた以上大變ですぞ」

アナン「オイ、ハル、ナイルの兩人、誰がそんな事を國依別に申せと云つたか、いつ又此

方が左様な言葉を出したか」

ハル「モウ御忘れになりましたか。あなた確に……ここにナイルも聞いて居りましたが一寸待て、此方にも思案があると云つたぢやありませんか。今更言はぬと仰有つても、そんな無理は何程上役でも通りませぬぞや」

アナン「それは其方に對して、一寸待て……と云つたのだ」

ハル「さうでせう、私に仰有つたから、即ち私があなたの代理となつて、國依別に一言の間違もないように傳へたのです。それが何處が悪う御座いますか」

ユーズ「あ、困つた奴だなア。モウ斯うなつちや仕方がない。……アナンさん、肝玉を放り出して、あなたと二人、國依別の前に十分に懇懇な詞を使つて、言向和し、怒らさない様にして、甘く行けばウラル教の副教主に祭り上げ、紅井姫は教主の奥

方どなし、エリナは私の奥方ど決定しておいて、腹帯を締めて一つ圓滑に舌剣を揮ふて見ようぢやありませんか。一枚の舌の使ひやうに依つて、平和の女神ともなり、戦争の魔神ともなるのだから、十分に巧妙な辭合を用ゐ、三五教ぢやないが善言美詞の言靈を以て、敵を悦服させるも云ふ手段に出ようぢやありませんか」

アナン 「それは至極妙案でせう。併しそれに先立ち、ブールの教主に申上げておかなくてはなりません。あなた御苦勞だが、其任に當つて下さい。私は是から表口に往て國依別さんに都合好く胡麻をすつて來ますから……」

と俄に吾れ、俺の辭を改め、美しい言葉を使ひ乍ら、ユーズは教主の居間へ、アナンは入口へと持場を定めて進み行く。

ハル、ナイルの二人はアナンの前に立ち

「サアノ、一寸先は如何なる事やら、暗か月夜か鼈か、困つた事が出來て來た」
と呟き乍ら、入口指して駆け出した。

(大正一一、八、一九、巻六、二七、松村眞澄録)

瑞 月

まめ人の神を忘れて只我を
あがむる事の如何に苦しき

第一章 賣言買辭（八七七）

アナンはハル、ナイルの兩人を先に立て、岩窟の入口に悠然として腰打掛け待つてゐる。國依別外二人の前に來り、忽ち地べたに手をつき乍ら

アナン

「これはく、國依別の宣傳使様、能くこそ斯様な所迄御入來下さいまして、岩

窟内一同恐悦至極に存じ奉ります。就いては今迄御無禮の御咎めもムりませうな

れど、三五教の御教通り、只何事も神直日大直日に見直し聞直し、我々の身の過ち

は宣り直し下さいまして、仁慈無限の大御心を發揮し下さいまして、何事もあなた

様の大御心によりて寛大なる御處置を取られむ事を神かけて念じ奉ります。あ、

惟神靈幸倍坐世」

と國依別を無暗矢鱈に拜み倒し、一口も不足を言はせない様に、追手翳手より鐵條網を張つて了つた。

國依

「これはくアナンさんどやら、何時ぞやは丸木橋の畔に於て、花々しく御奮闘

遊ばされ、實にあなたの神謀鬼策には國依別感嘆の舌を巻いてゐる。兵法の奥の手

は三十六計の中、逃ぐるを以て第一とすどかや、世の中は勝たうとく思ふに依つ

て治まらない、あなたの方の様に、少數の敵に勝を譲り、耻かしけもなく算を亂して

御遁走遊ばす其御勇氣には、我々も倣はなくてはなりません。負て勝取るどやら、

ネットプライスの掛値なしの店よりも、ドツサリと負値を吹き立て、客に對しドツ

サリ負てやる店の方が能く繁昌致しますから、定めてウラル教もよくお負遊ばした

のでせう。それ故得意は僥客兆來の御繁昌でゐませう。イヤもう國依別、側へも

寄れませぬ。さうぞ相變らず御店の繁昌する様に、今度もキレーサツパリと御負下
さいませ。あなたの方に於て、算盤が合はないから負ないで仰有れば仕方がありま
せぬ。私は漆彦命となつて負かしてあげませう。チツとはうるし、否うるさくて
も、そこが何事も神直日大直日に見直し聞直し宜り直すのでムいますからなア、ハ
、ハ、ハ、」

アナン 「ハイ、まだ御取引の御用命を蒙らぬ中から、負てく、どこ切り御便利を計
つて居りまするから、何卒榮當々々御最眞の程を御願ひ申します」

國依 「時に我々の参りましたのは、一つ賣つて貰ひたい品物がムいまして、ワザく當
商店へ罷り越した、新得意でムいます。さうぞ安く負て御譲り下さいませ」

アナン 「御註文の品物とは一体何物で御座いますか。動物か、植物か、器具か或は魚類

か、貝類か、何なつと御註文次第、有さへすれば只でも進ませませう。併し乍ら無い
ものは御免を蒙つておかねばなりません」

國依 「我々の買ひ求めに來た者は動物や植物ではありませんせぬ。摺出し、ヒキマスと住家
で御座います」

アナン 「へー、これは又妙な御註文ですな。ギマスなどは此館には居りませぬ。摺火も
なければ賣る様な家も生憎仕入れて居ませぬので、さうぞ外さんを御尋ねなさつて
下さいませ。へー毎度有難う、御最眞に預りまして……」

國依 「毎度御最眞と云ふが、今日初めて註文に來たのぢやないか」

アナン 切りに腰を屈め、揉手をし乍ら

アナン 「へー、これは商ひの習慣で御座いまして、始めての御客さんでも、毎度御ひい

きに……云ふ事になつて居ります。さうぞマア奥へお這入り下さいまして、京の御茶漬でもドツサリ食つて下さつて、御歸り下さいませ」

國依 「最初の我々が註文致した、キンスと云ふのは、三五教のキジ公の事だ。又摺出しと云ふたのはマチ公の事だよ。住家と云ふたのはエスと云ふ事だ。何時までも穴倉の中へ仕舞ひ込んでおいても、餘り利益にもなりません。新規流行の此時節値いき物になれば賣れ行きませぬから、買手のある中にお賣りになる方がお店のお得だと考へますがなア」

アナン 「コレ計りは親方の意見を聞かねば、番頭の自由にはなりませんから、一寸待つてゐて下さい。マア奥に旦那様がお茶でも立て、お待受で御座いますから、さうぞ何なら御這入りになつては如何で御座います。たつて厭なお方に這入つて貰ひたい

事も御座いませぬ……では御座いませぬが」

國依 「何は兎もあれ、奥へふん込んで、プールの大將に直接面談を遂げ、三人の男を受取つて歸りませう。……サア姫様、エリナさん、私に従つて御出でなさりませ」

と無理に行かうとする。アナンは大手を擴げ

アナン 「モシ／＼それは餘り理不盡と申すもの、暫くお待ち下されば、教主の御許しが出ますから、それ迄餘り永くとは申しませぬ。暫くお待を願ひます」

國依別は

國依 「イヤ、少しも猶豫はならぬ。邪魔めさるな」
と進み入るを、大手を擴げて、アナンは